

飯山市田草川尻遺跡
緊急発掘調査報告書

1973・2

飯山市教育委員会

飯山市田草川尻遺跡
緊急発掘調査報告書

1973・2

飯山市教育委員会

序

飯山市田草川尻遺跡は縄文前期、弥生後期、土師器後期の永い期間の集落址として、当地方では重要な遺跡であります。

今度国道 117 号線飯山市静間の道路改良事業の施行にともない、同道路が遺跡を縦断する形となるので、その記録保存をはかるため発掘調査を実施する必要がある旨、県教育委員会から連絡がありましたので、市教育委員会としまして文化財保護の立場から発掘調査会を結成し、事業の実施に当ることになりました。

飯山市文化財専門委員高橋桂氏を調査団長にお願いし、昭和47年4月下旬～5月中旬の間発掘調査を実施しました。その間調査団長を始め調査員各位の適切なお指導と、飯山北高地歴部、飯山南高考古班、地元静間地区の方々の献身的な作業により、調査は順調に進捗し、同遺跡の住居址としての解明に、貴重な成果をおさめえたことに対し、調査に当られた調査団員、協力者のみな様に深甚な感謝を申し上げます。

又本調査のとりまとめに関し、職務の余暇を割愛して、真摯な態度で、報告書の作成に努力された各位に衷心よりお礼申し上げます。

昭和 48 年 2 月

飯山市田草川尻遺跡調査会長

飯山市教育長 小 林 忠 一

序

昭和45年度から一般国道 117 号線飯山市静間地籍において、国庫補助道路改良工事を施工することになりましたが、田草川尻遺跡がこの工事区域内に入るため、この記録を保存することは施工者の責務であると考えてこの発掘調査を飯山市教育委員会へ委託しました。

飯山市教育委員会では飯山市田草川尻遺跡調査会を結成し、その発掘調査では、調査団ならびに地元の方々のご努力とご協力により貴重な埋蔵文化財を発見することができました。

この調査結果が整理されて本報告書として出版されることになったのは喜びにたえません。ここに関係者各位に心から感謝の意を表明します。

昭和 48 年 2 月

長野県飯山建設事務所長

野 崎 力

例 言

1. 本書は長野県飯山建設事務所の国道 117 号線静岡バイパス敷設工事に伴う緊急発掘調査書である。
2. 本調査には、日本大学講師永峯光一氏、長野県教育委員会文化課係長金井汲次氏、同課指導主事桐原健氏の御指導をいただいた。
3. 遺物整理には、長野県飯山北高等学校地歴部の協力があった。
4. 使用した写真は全て調査員風間敬一が担当した。
5. 実測図は国学院大学生中島庄一が中心となってい、一部を松沢芳宏が担当した。
6. 執筆は松沢芳宏、上松昭、高橋桂の三人で項目別に担当し、文末に文責を明記した。

目 次

序言	野崎 力
序言	小林 忠一
I 経過	5
1. 発掘調査にいたるまで	5
2. グリットの設定	7
3. 調査日誌	7
II 環 境	13
1. 遺跡の位置および地形	13
2. 周辺遺跡と歴史的環境	14
III 調 査	17
1. A地区	17
2. B地区	17
3. C地区	18
4. D地区	18
5. E地区	18
IV 遺 構	19
1. 住居址	19
① H-1号住居址	19
② H-2号住居址	19
③ H-3号住居址	20
2. 土 壙	20
3. 祭祀遺構	25
① 1号祭祀遺構	25
② 2号祭祀遺構	25
V 遺 物	29
1. 縄文式土器	29
2. 弥生式土器	29
3. 古墳時代および歴史時代の遺物	30
① 住居址内出土遺物	30
② 土壙内出土遺物	35
③ 祭祀遺構出土遺物	35
④ 遺構以外の遺物	40
VI まとめ	40

1. 経 過

1. 発掘調査に至るまでの経過

昭和46年6月上旬、県文化課から国道117号線静岡バイパス路線が飯山市静岡北原地籍にある田草川尻遺跡を縦断するので、緊急発掘をしなければならないという連絡があった。

7月5日、県文化課金井係長が現場を視察する。視察後飯山建設事務所で打合せ会議を開く。席上金井係長から県の意向として記録保存をするため、緊急発掘をしなければならないが、その調査発掘を飯山市教育委員会へ委託したいむねの依頼があった。

7月13日、市教育委員会では文化財専門委員会を開き、緊急発掘について協議した結果調査委託を受けることを決定。発掘調査事業は、飯山市田草川尻遺跡発掘調査会を結成して、調査会が事業主体となって行うことを決定する。

8月21日、県教育委員会教育長より正式に「公共開発事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱い」として記録保存事業を行ない、調査委託先を飯山市教育委員会にするむね、通知があった。

12月17日、飯山市文化財専門委員会全員が全員調査会結成準備委員となり、飯山市田草川尻遺跡調査会準備会を開き、会長に飯山市教育長が就任、その他調査会の規約、調査団員のメンバーの編成を協議する。

調査団長に飯山北高高橋桂氏、調査主任に松澤芳宏氏を決定。調査団員の氏名を決める。その他調査会規約の原案を作る。

47年に入り2月28日、飯山市役所で調査会役員会を開く。

調査会長に飯山市教育長職務代理者 江口 憲隆
副会長に飯山市公民館秋津分館長 上原 幸夫
調査会顧問として

飯山市長 春日 佳一

県文化課文化財係長 金井 汲次
長野教育事務所飯山支所長 林 光司
〃 指導主事 神田 治房

の諸氏を委嘱する。

4月1日 調査会役員、団員合同会議を開く。事務局より「飯山市田草川尻遺跡調査会規約」を説明する。協議に入り、調査団の結団式を4月28日午後5時から市内S旅館で行なうことを決め、発掘調査は4月29日から5月10日の間に行うことを目標にすることも合意する。会議終了後団長、主任、調査員で現場を下見する。

4月11日 飯山建設事務所長と調査委託契約書を取り交わす。

4月15日、高橋団長、松沢主任、事務局で発掘器材の準備について細部の打合せを行う。

4月23日 午前9時から測量士、全体測量図作製のため現地測量を終日行う。午前中テント、発掘器材の運搬、午後桑畑の抜根作業を業者を委託してブルドーザーで行う。

4月28日 市内S旅館で午後5時半から結団式を行う。調査員、補助員全員顔をそろえ明日から始まる発掘作業について細部の打合せを行う。終って上原調査会副会長の音頭で和気あいあいの中に調査団の明日からの健闘を期して乾盃する。

飯山市田草川尻遺跡調査会、調査団員の氏名は次の通りである。

会 長 飯山市教育長職務代理者 江口 憲隆
副会長 飯山市公民館秋津分館長 上原 幸夫

顧問 県文化課文化財係長 金井 汲次
// 長野教育事務所飯山支所長 林 光司
// // 指導主事 神田 治房
// 飯山市長 春日 佳一

理事 飯山市文化財専門委員 佐藤 政男
// // 高橋 桂
// // 弓削 春穂
// // 斉藤 二六
// // 萩原 是彰
// // 藤沢 正平

飯山市小学校長会長 小林 正紀
飯山市中学校長会長 深井 和
飯山市秋津小学校長 高藤雄一郎
// 秋津大久保区長 小林 輝雄

監事 飯山市収入役 小林 正四
// 飯山市教育委員 萩原甚之丞

〔調査員〕

団 長 飯山北高等学校教諭 高橋 桂
調査主任 日伸精機株式会社長野工場 松澤 芳宏
調査員 中野小学校教諭 田川 幸生
// 須坂園芸高等学校教諭 関 孝一
// 多摩ニュータウン 宮崎 博
// 飯山市第二中学校教諭 田中 清見
// // 風間 敬一

調査補助員

国学院大学 大原 正義
// 中島 庄一
// 森 尚登
駅沢大学 金井 正三
飯山郵便局 高橋 均

発掘協力者

飯山北高等学校地歴部、地歴部OB
飯山南高等学校考古班

〔事務局〕 飯山市教育委員会

社会教育係長 洪沢 陽一
社会教育係主査 上松 昭
社会教育係主事 佐藤 俊平
指導 日本大学講師 永峰 光一
県文化課係長 金井 汲次
県文化課指導主事 桐原 健

以上の諸氏である

(飯山市教育委員会主査 上松 昭)

2. グリットの設定 (第2図参照)

当遺跡において、遺物の最も濃密な分布を示すところは、東西方向に、線路から千曲川にかけての200mであり、南北方向には、田草川を介在して北部地域の巾60m、南部地域の巾100m、合せて160m程の範囲内である(第3図)。

建設省のバイパス道路は既設の千曲商事専有道路に沿って計画されているので、グリットの設定は、バイパス計画路線範囲内であって、既設道路以外の畑地に限られることになった。そこで南北方向約200m、バイパスの幅員約15mを調査対象区域に決定し、カーブした計画路線内にグリットをスムーズにおさめる必要から、川南、川北を分離してグリットの座標軸を定めた。

川南、川北両地区ともに南北方向にX軸、東西方向にY軸を定め、図示した数値の番号からX・Y両軸の始まりを定めた。なお、グリットの表示の仕方は(X, Y)とした。こうして設定されたグリットにおいても、実際に発掘できる場所は先に記したように既設道路以外の畑地に限られている訳であり、5つの小地区に分離されている。これもA、B、C、D、E区と仮称した(第6図)。(松沢芳宏)

3. 調査日誌

4月29日(土) 天候 晴

午前9時作業開始。奥信濃にしては珍らしく春の訪れが早く、付近の山々の木々が萌え始めている。

作業は、グリット設定から始まった。千曲商事既設道路は、バイパス敷設予定地の丁度中央部を通っているので、これをさげ両側にグリットを設定した。

ほぼ、東西にY軸、飯山市街地に向ってX軸をとりグリットを設定。

バイパス敷設予定地の両側に更に遺跡の広がり認められるので、将来のことを考えて、Y軸をNo5からとした。なお、田草川以北でも同様に更に遺跡の広がりを想定してY軸はNo105からとした。

(Y軸5~7, x軸5~49)をB地区、(Y軸10~11, x軸5~16)をA地区、更にA地区の北方、田草川に近い地点にC Y軸11, x軸40~44)を設定しC地区とした。田草川以北では、道路東側に(x軸105~106, Y軸107~108)のグリットを設定し、D地区とし、西側に(Y軸, 110~111 X軸107~129)とのグリットを設定してE地区とした。

グリット総数は166設定した訳けである。今後の記述の都合上グリットナンバーはx軸を前に記し、Y軸を後にすることを予め断っておきたい。

発掘作業は上原幸夫調査会副会長の歎入式で開始した。

A地区では各グリットから少量づつではあるが、中期弥生式土器破片が出土し、石組とおぼしきものも検出された。この地区では、黒色土の堆積が意外に深い。

B地区南端ではA地区と対称的に黒色土の堆積は薄い。礫の混入も多く遺物の出土はほとんど認められない。中央部以北の各グリットでは弥生式土器、土師器の破片が出土しはじめた。

今日1日で、41グリットに手をつける。午後3時、長野県教育委員会文化課係長金井波次先生が見られ種々と指導を受けた。また飯山市文化財専門委員弓削春穂氏見学に来られる。北信タイムス記者取材にくる。

4月30日(日) 天候 晴

A地区では住居地と推定される落込みを発見し追跡する。

B地区では昨日に続き(35, 5~6)の発掘作業を継続するとともに(44, 5~7)のグリット

の発掘に着手する。

(24、7)のグリットで直径30cmのピットが検出され、更に(25、6～7)グリットの南側に落込みが発見されたためそれを追跡する。住居地となる可能性が強い。(28、7)のグリットで高坏の脚部出土。また(30、5～7)の各グリットで南側に落込みが発見され、住居地の可能性が強まる。

(30～35、5～7)にかけてピット数箇所が発見された。プランからして土塋と思われる。

これらの住居地、土塋と思われるものを追跡するとともに北側の未発掘グリットの発掘に着手する。土器の出土が次第に多くなる。

一方C地区の発掘にも着手する。(44、11)の西壁で縄文式早期末と推定される丸底形の土器が出土した。その他、弥生式土器破片が若干出土した。この地区では畑の耕起が深く行われており、大分攪乱を受けていた。

5月1日(月) 天候 曇後雨

B地区(45～49、5～7)のグリット発掘に着手。また(26、6)のグリットを住居地の関係で発掘。

生憎の雨模様に加えて風が強く、作業がはかどらないので午後は調査員を主体として発掘を行った。

田草川の北側にグリットを設定(107～114、106)して発掘に着手。(111、106)のグリットで土器片が比較的まとまって出土し、今後の調査に期待がもたれる。なお、(106～109、106)のグリットは攪乱を受けている形跡がよい。

一方、A地区では(10～11、10～11)にかけて露出している住居地の追跡を森、中島調査員が中心となって行なった。

午後3時頃豪雨。発掘中止のやむなきにいたる。

5月2日(火) 天候 午前中雨、午後晴

雨のため午前中は発掘作業を中断し、土器洗いをする。5月にしては肌寒く3月中旬頃の陽気で、土器を洗う手がかじかむほどであった。

午後にいたり雨があがり晴天となる。発掘を再開。

B地区北側のグリットは昨日来の雨のため水がたまっていて発掘作業が出来ない。従って昨日着手したD地区(107～114、107)の発掘と新たにE地区(107～129、111～112)の発掘に着手する。

E地区では(119、111)のグリットの中期弥生式土器破片が散在し、(117～129、110～111)にかけてのグリットでは黒色土層下は礫層となっていた。黒色土は北するほど厚く堆積している。そして、黒色土層下の礫層は、黄褐色の山砂を混じえているところから田草川のもたらしたものであることは疑いない。

D地区(111、106)のグリット南壁及び東壁にかけて多量の土器が重なり合って出土。土器群の重なり合いの範囲を確認するため(110～112、105)のグリット半分を発掘することとした。午後4時に(111、105)グリットの西壁中須恵器の が出土した。飯山地方では初めての出土である。

A地区住居地内の遺物出土状態の実測を森調査員が中心となって行なった。

5月3日(水) 天候 晴

B地区(36)以北のグリットは昨日の雨のため泥沼化しているので、以南のグリット内遺構の追跡を行う。調査の進行につれて、住居地4軒分の存在が確認された。しかし、いずれも後世の破壊をうけており完全な形で検出ができないことが判明する。住居地のかかるグリットは(22～25、

5)、(25、5~7)、(26、5)、(30、5~7)である。

また、(16、5)、(29、7)、(30、6)、(32、6~7)、(34、7)、(33~34、6~7)、(34~35、5)の各グリットで土壙と思われる落込みが発見された。

A地区では、昨日に引き続き住居地内の遺物の実測を行い、午前中に終了。続いて写真撮影を行い、遺構の追跡を行なった。

D地区では、土器群の清掃を行うとともに拡張部の追跡をする。特に遺構らしきものは発見されない。

E地区では(112、111)のグリット中央から西壁にかけて挙大の礫群が出土した。この礫群の範囲追跡のため同グリット西側で調査予定地域外の猪瀬宏氏所有畑に新たにグリットを設定(111、112)して発掘を行った。その結果、細長い河原を中心にして土器が比較的まとまって出土し、礫群の範囲もほぼ把握できた。(119、111)のグリット中央部で礫群が検出され、その上部に弥生式中期末所属の土器破片が存在し、あるいは同時期に属する土壙かと思われたが、不明に終わった。更に(124、111)、(125、111)でも土壙と思われるものがあつたが判然としなかつた。

5月4日(木) 天候 晴後曇

A地区では住居地の実測を行ない出土土器をとりあげる。

B地区では、土壙及び住居地の追跡を行なう。その結果、土壙、住居地の輪郭が次第に明らかになってきた。

E地区では、拡張部グリット内に長大な河原石をほぼ南北に横たえ、その河原石をあたかも支えるかのように両端に河原石が立てられていた。そしてこの石組みを中心にして甕、高坏等の破片が出土した。礫群がこの遺構に続いており、礫群と土器及び配石とがそれぞれ密接な関係をもっていることが判明した。午後、松沢調査主任が、中心となって実測を開始した。

D地区では、土器群の範囲を更に追跡するため(110、106)グリットの北壁を取り除いたところほぼ楕円状に土器がびっしりと重なり合っていた。出土土器は甕、坏が主体であり高坏がほとんど認められない。坏は二枚乃至三枚重ねの状態で検出された。

かようにE地区の配石と土器群、礫群の有機的な関連、D地区の土器群の出土状態は、通常の遺構のものではなく祭祀的な意味をもった遺構であることを窺わしめるものである。

5月5日(金) 天候 曇後雨

午前10時頃から豪雨。発掘作業を中止。夕刻まで激しい雨が降りつづく。

5月6日(土) 天候 曇後晴

リンゴの花盛り、発掘地点周囲はリンゴ園であるため甘ずっぱい花の匂がたちこめている。発掘作業開始頃は、萌黄色だった周囲の山々の木々も今ではすっかり緑色になった。そして一雨ごとに緑が濃くなってゆく。

A地区では壁のセクションをとる。B地区では土壙、住居地の追跡を行う。昼頃にいたり10号土壙上部より14枚重なり合つて宋銭出土。この宋銭が果して土壙と密接な関係があるかどうかは後の検討に俟たねばならないが興味あることといえよう。住居地の輪郭も次第に明確になってきた。

D地区では、土器群の存在する(110~111、106)のグリットの壁のセクションをとると同時に(112~117、106)グリットを掘り下げる。(118、106)グリットより手づくぬ土器出土。(113、106)より滑石製円盤出土。この付近が前記した土器群とともに祭祀の場であつたろうことが濃厚となってきた。

午前2時頃県教育委員会文化課桐原健指導主事見える。

5月7日(日) 天候 晴

B地区の住居地、土壙の追跡を行う。住居地の検出には地層不明瞭のため苦勞する。壁の検出は地層が不明瞭のため明確に検出できなかつたが、幅15cm、深さ5~10cmの溝が圍繞していたためおおよその範囲は確認できた。住居地のほぼ中央に貯蔵穴と確定されるピットが存在し、土器が割れまとまって出土した。そして付近には礫が数個置かれていた。

午後1時、日本大学講師永峰光一先生見えられる。そして先生の指導のもとにD地区の土器群に接する壁を除去する。その結果、土器群に続いて礫が配置されていることが判明した。礫のきれた場所には、焼土と灰層が存在した。はこの石組の所から出土しており、土器群と関係のあるものと思われる。

土器群の実測と写真撮影を行う。

5月8日(月) 天候 晴後曇

永峰先生の指導のもとにD地区祭祀遺構と思われる石組の実測とE地区配石遺構の断面を観察するため礫群の中央部を掘り下げる。その結果、礫群の下部は田草川の河床礫の堆積であることが判明した。

配石と礫群のセクションをとり、配石と土器をとりあげる。なお、この配石遺構グリットの南壁に多量の土器の存在が認められ、更にそれが南に続き土器群を形成するものと推定されたが、パイパス工事地区外のことであり、今回の調査では明確にできなかった。

夕方、D地区の土器群の取りあげ作業をはじめ。

5月10日(水) 天候 晴

D地区祭祀遺構の土器取りあげ作業を行う

5月11日(木) 天候 晴

B地区南側住居地の実測及び北側住居地北壁のセクションをとる。A地区住居地のセクションをとる。C地区でもセクションをとる。D地区では土器の取りあげ作業を続行。土器群の中に焼土層が混在していた。

5月12日(金) 天候晴

B地区土壙付近の壁の取り払い及び南側住居地のセクションをとる。D地区では土器の取りあげ作業続行。

5月13日(土) 天候 曇

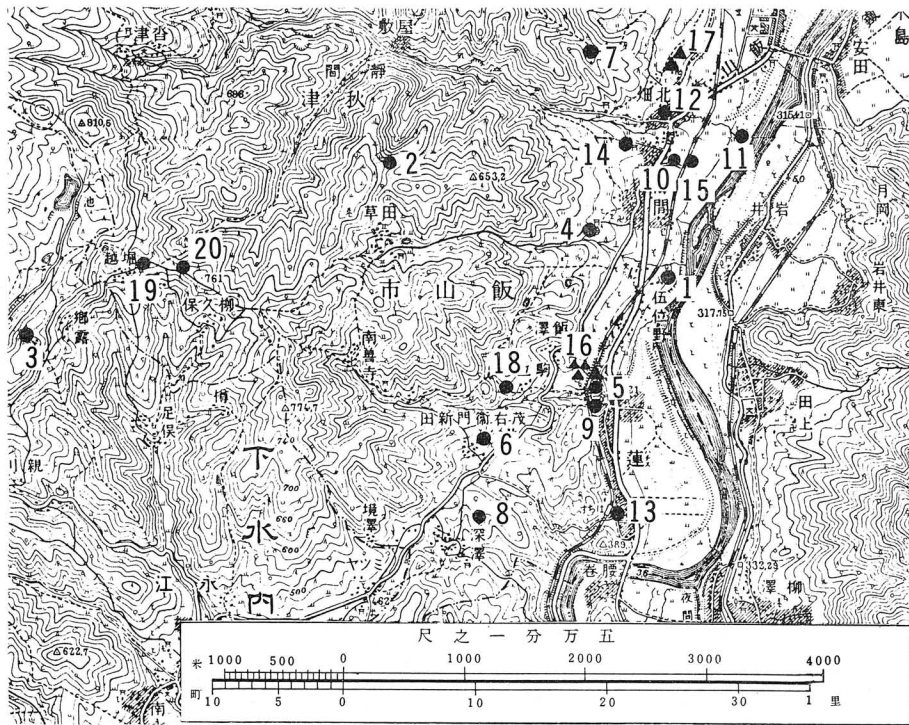
B地区南北住居址と土壙群の清掃を行い、写真撮影をする。

D地区では土器の取りあげ作業を行い、夕方までに完了する。なお土器取りあげ作業と併行してD地区全体のグリットの清掃を行い、西壁セクションをとる準備をする。土器群のグリット以南のグリット(107~109、106)では急激に落ち込み、しかも地層は著しく攪乱されていた。古老によれば、該地点は土器群存在の地点より一段と低くなっており、戦後ブルドーザーによる畑の等平化がなされたとのことである。それを裏付けるかのように(108~109、106)のグリットで土器群のレベルよりはるか下層で釘の錆びたものが数点出土した。

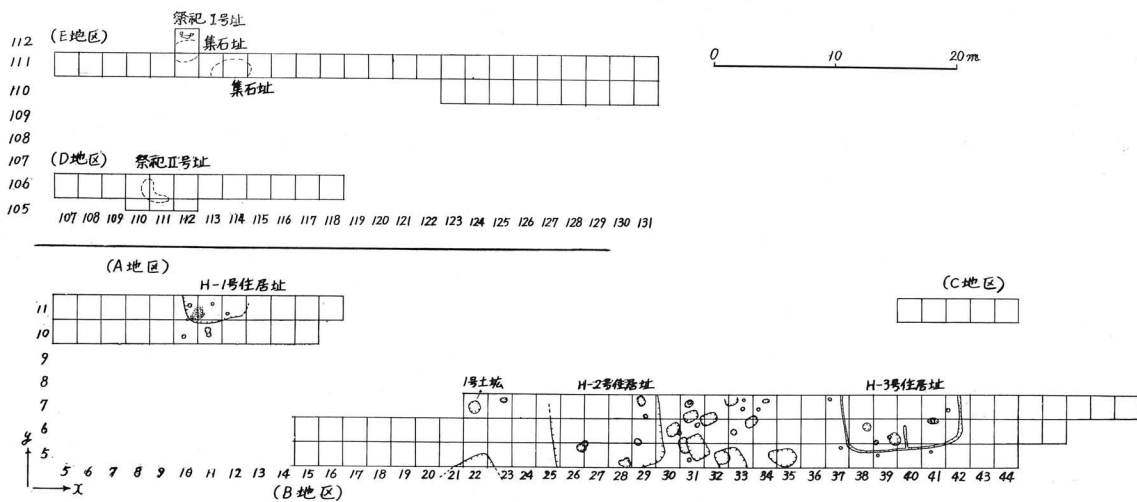
5月14日(日) 天候曇後小雨

B地区の住居址、土壙のセクションをとる。午後4時作業終了。これで田草川尻遺跡の発掘調査は全部完了する。

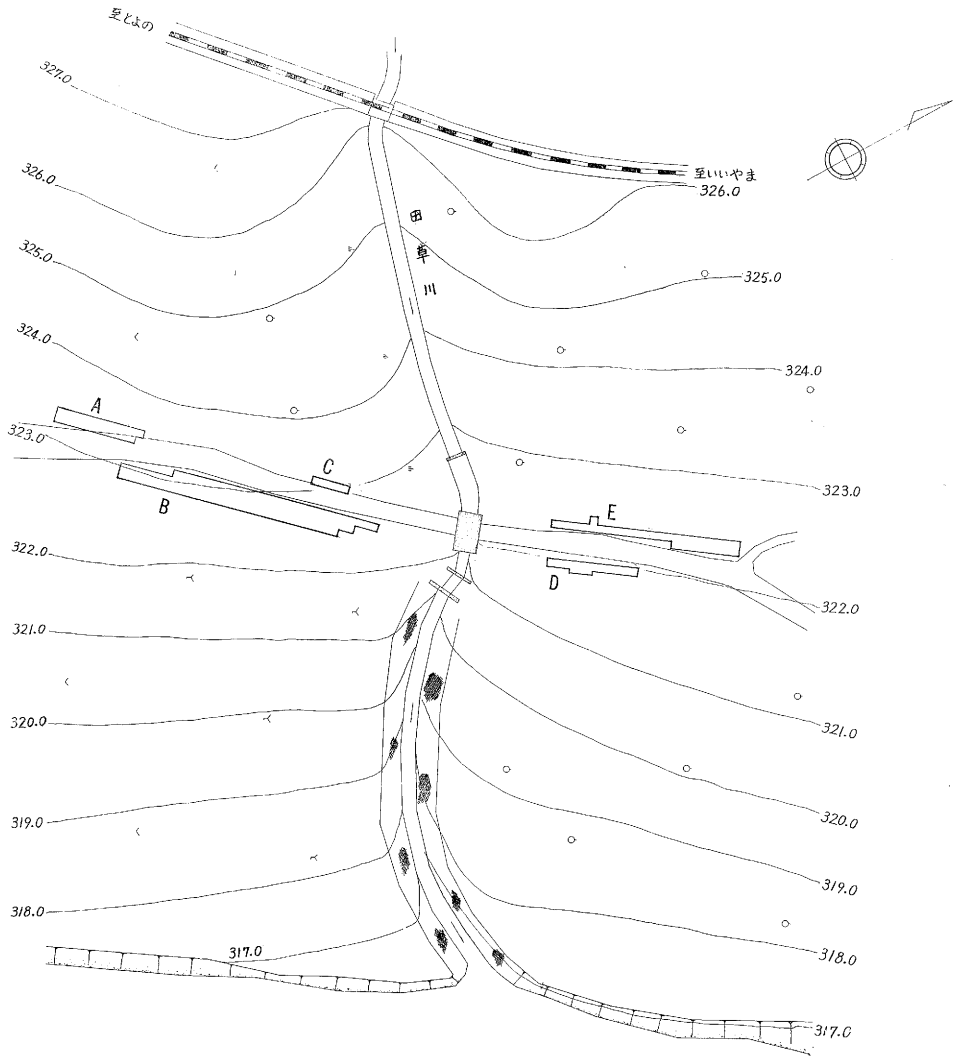
(高橋 桂)



第1図 遺跡周辺地形図 No.1 田草川尻遺跡



第2図 グリット全体図



第3図 遺跡全体図

Ⅱ 環 境

1. 遺跡の位置および地形

遺跡は、長野県飯山市大字蓮字北原に所在する（第1図）旧行政区画では下水内郡秋津村であり、昭和29年飯山市となっている。

善光寺平の沃地を形成した千曲川は、中野市立ヶ花地区と上水内郡豊野町中島地区にいたると東側は、立ヶ花地区から中野市古牧にいたる長丘丘陵、西側は下水内郡豊田村穴田地区にいたる米山山塊および斑尾山麓の奥手山丘陵の間を穿入蛇行しつつ流れ、幅の狭い平地を形成している。そして、長丘丘陵の北端である中野市古牧地区を過ぎると再びその流域を広げ信濃の最後の平地を形成する。これが飯山盆地である。飯山盆地を過ぎる千曲川は再び穿入蛇行しつつ越後へと流れているのである。

飯山盆地が展開する最初の地点に田草川尻遺跡が存在している。飯山盆地の西縁は上境～鬼坂断層線によって画されているために急傾斜をもって平地と接している。そのため山地から流出する小河川は急流をなし、斜面の急な小扇状地を形成している。

今回発掘調査をなした田草川尻遺跡の所在する飯山市秋津地区においても小河川の形成した三つの小扇状地がある。

その一つが、遺跡の所在する田草川扇状地である。この扇状地を形成した田草川は典型的な荒れ川の状態を示し、しばしば氾濫し河川沿岸の耕地、人家に大きな被害をあたえている。従って上流から下流への土砂の流出が大きく、下流域の平地である水田地帯では耕土下に大小様々な礫の堆積が見られるのである。

遺跡は、田草川扇状地の末端面に存在している。グリット設定地点から千曲川までの距離は約100mであり、河床からの高さは6mほどである（第3図）。古老によれば、千曲川の増水した時でもグリット設定地点までは浸水したことが今迄にないそうである。これは、千曲川河床からの比高があまりないけれども、対岸の中野市岩井地区が大きな低地帯を形成しているためであろうと思われる。

遺跡付近の地層についてみれば、上から耕土、黒色土層、黄褐色土層へと変移している。そして黒色土層、黄褐色土層中に礫の混入が多い。特に黄褐色土層中に多い。本来ならば、この黄褐色土層はローム層とみなして差支えないものであろうが、礫の混入度、黄褐色土層中に認められる山砂層の薄い堆積等からしてプライマリーな状態ではなく、田草川の氾濫による二次堆積の傾向が強いのではないかと思われる。

遺跡付近の地形についてみると南方約1000mほど距てた地点には宮沢川によって形成された小扇状地が低湿地帯に接しており、北方にもほぼ同じ、距離をもって清川が流れ、清川扇状地を形成している。このため秋津地区の平地帯はこれらの河川によって形成された小扇状地がならび、微地形的には谷状地形と尾根状地形とが、交互に展開している。谷状の地点では地下水面が浅く容易に水が得られ、湿地帯も存在しており水田が展開している。それに比して尾根状の地帯は地下水面が深く水が得にくい。そのためであろうか集落は水の得やすい谷状の地点に多く存在する。グリット設定付近の地下水面は、村人の話によれば意外に深く水が得にくいとのことである。そのためであろうか、発掘調査した付近は果樹園となっている。

なお、遺跡の東南には北信五岳の一つである高社山が聳えたっている。また西側100mほどの所を国鉄飯山線が走り、更にその西側を国道117号線が走っている。（高橋 桂）

2. 周辺遺跡と歴史的環境（第1図参照）

自然環境の項で触れたように、田草川尻遺跡①は千曲川西岸の田草川扇状地扇端に発達した複合遺跡である。信濃史料第一巻（上）の地名表によると、伍位野として次の遺物を記載している。

（繩）加曾利Ⅴ式、（弥）栗林式、箱清水式、有孔石剣（残片）、（須）、破片、

また、その後の調査で、縄文式前期の関山式併行、黒浜式併行、南大原式、上原式、縄文中期初頭型式、土師器（和泉式、鬼高式、国分式）、凹石、石鏃、石匙、磨製石斧、打製石斧、土錘、玉類の各種遺物が発見された。

これら田草川尻遺跡の性格が示すように、この付近一帯の遺跡は、縄文式時代から弥生式時代、古墳時代、歴史時代の各時代に亘っており、それらの遺跡が単独で、あるいは複合して、またそれぞれの立地環境をとって各所に存在している。

与えられた表題が、周辺遺跡と歴史的環境ということであるが、田草川尻遺跡は千曲川の西岸に位置し、旧下水内郡秋津村の中心でもあるので、ここでは主に秋津地区の遺跡や歴史的環境について記述してゆきたい。

先土器時代の遺跡は、現在までのところ発見されていない。

縄文早期の遺跡としては、田草川を溯った斑尾山岳地帯に田草オヤチ遺跡②がある。ここから早期末の絡条体圧痕文土器の破片が見つまっている。また隣村、下水内郡豊田村、月夜岳遺跡③からは押型文土器と条痕のある尖底土器破片が発見されている。また斑尾山岳地帯を流下してきた田草川や宮沢川の沿岸にあって、それらが形成した扇状地の扇頂部分付近に残る洪積層の残丘上に山ノ神遺跡④と五里久保遺跡⑤がある。山ノ神遺跡からは山形、格子目、楕円の各押型文土器が発見され、五里久保遺跡からは山形押型土器が発見されている。

前期の土器を出す遺跡としては田草川尻遺跡のほか、茂右衛門新田公会堂前遺跡⑥から黒浜式比定土器、北畑部落西方の牧草地⑦からは南大原式、諸磯C式土器が出土している。いずれも標高400m前後の洪積層の台地上にある。

中期の遺跡では深沢遺跡⑧が著名である。発掘調査によって中期初頭から中葉にかけての各種土器が出土し、中、南信地方の勝坂式文化圏の土器型式とは、異相の土器型式をなしていることが判明した。また土偶も数多く発見されている。遺跡の存在する一帯は沖積地蓮平を一段登り切った、通称蓮地区上段と称する洪積層の丘陵地帯であって、標高400m前後である。

中期後半の遺跡は深沢などよりも標高の下がる場所に多く、先記した五里久保遺跡の南側で、宮沢川の対岸にあたる山根遺跡⑨から中期末の土器片が発見されている。また静岡の清川扇状地の扇央部分にあたる中町遺跡A地点⑩において新たに中期末の遺跡が見つかった。これらの遺跡は、すべて千曲川に注ぐ小河川の付近にあり、その立地は縄文後期、晩期へとスムーズに移行してゆく。

縄文後期の良好な遺跡としては五里久保遺跡があげられる。堀ノ内式、加曾利B式比定土器が発見されている。また清川尻遺跡⑪の清川河床からは堀ノ内式土器が発見されている。晩期の遺跡としては、近年、山ノ神遺跡が注目されている。佐野Ⅰ式、Ⅱ式に属する多量の土器片とともに魚形線刻絵画のある土器片が発見された。

弥生式時代になると、水稻耕作という生産様式の変化から、今まで高地、低地に混在していた遺跡が低地に統一されてくる。北畑⑫、上組⑬地籍から大型蛤刃石斧がそれぞれ発見され、中町の静岡神社境内⑭からも弥生期に属する石斧が発見されている。田草川尻遺跡からは弥生中期の栗林式土器、後期の箱清水式土器が発見されている。

弥生期の遺跡はその多くが千曲川に注ぐ小河川の形成した扇状地上か、また扇状地の付近に存在する洪積台地上にある。次期の古墳時代、歴史時代の遺跡もまた、これら弥生期の立地を踏襲して

いる。

古墳時代の遺跡としては田草川尻遺跡と中町遺跡⑩があげられる。中町遺跡とは、中町部落の東側の郷屋地籍一帯を指す。

田草川尻遺跡と中町遺跡に関連して、古墳が田草川尻遺跡の西方の山地、また中町遺跡の北方の丘陵にそれぞれ存在している。前者が五里久保古墳群⑩で、後者が法伝寺1、2号墳⑪である。五里久保古墳群中最大のもは径25m、高さ2.8mの円墳で小高い丘上にあり、そのまわりに小円墳が2基存在している。また最近になって、その下方の台地上に積石塚一基が発見された。法伝寺古墳は径30m高さ5mと径18m高さ3mの円墳である。後者は墳頂下30cmで鉄剣が出土しているし、南方に造り出しのついた状態も観察されており、問題のある古墳である。

歴史時代の遺跡については、田草川尻遺跡はもとより、中町遺跡からも国分式に属する土師器、須恵器が多量に認められている。平安時代に集落があった証拠であろう。また、これら低地性の遺跡のほかに、山地にも小規模の遺跡が見られるのも、この時期の特徴で、これは秋津地区に限らず県下全般に見られる傾向とされている。(註)。田草オヤチ遺跡から国分式の土師器と須恵器のほかに鉄滓が発見されているし、駒立遺跡⑫からも国分式の土師器の破片が発見されている。また堀越部落北方の水田⑬や堤付近⑭にも国分式の土師器の破片が散布している。

以上、主に秋津地区の遺跡について簡単に記述してきた。その中で特に古墳時代と歴史時代の遺跡については、二、三の興味ある歴史的事象と関連して考えてみるができる。

一志茂樹氏は「信濃と越後とを結ぶ古代の幹路」において、越後国府が直江津市域へ遷らない以前、信濃と北陸道を連結していた道として、豊田村替佐より分れた斑尾山東麓路線と、千曲川左岸に沿って北上する道とを掲げられ、また、高井方面から延びて来た道が、当蓮地区で千曲川を渡り、西にさかのぼって、斑尾山東麓路線と合していたことも推定されて、その証左に上南善寺、柳久保間の沓掛なる地名をあげられた。

積石塚の存在する五里久保古墳群は沓掛地籍へ結ぶ谷筋の開口部付近にあたっており、田草川尻遺跡の位置も至近の距離にあって、興味ある問題を提起している。

次に静間は、保元物語、平家物語に見えている静間氏の根拠地であったであろうことが想定されており、それら氏人の居館址に直接結びつくかどうか、定かではないが、館址にまつわる地名、たて、小たて、上くるわ、下くるわなどが慶安年間の検地帳に見えており、それらを一括すると1ha以上にも及ぶという。このうち「たて」は現在北畑部落に残っており、別に静間氏館址と伝承されているところに静間神社境内がある。

平安時代後半の武士団の発生当初、既に静間地区一帯にそのきざしが認められるとすれば、その背景に集落が存したことが想像され、前記、中町遺跡と田草川尻遺跡なども、それらの関連の中で考えてゆかねばならない問題ではないかと考えられるのである。(松沢芳宏)

(註) これら山中遺跡の性格を獵人のかに、鍛冶、箕直し、トベナイ(各種多様な呪いや予言を試みる)などを業とする山中流浪の山の民の居住地とする説もあるが、当該、秋津地区のようなごく浅い山中の各所にも存在する遺跡にも、すべてそれらの概念を導入することはできないであろう。弥生式時代、古墳時代と引継がれた低湿地での水田耕作に加えて谷水田の開発も次第に行なわれるようになった事実として、それら山中遺跡のある部分について、想像が許されてよいのではないだろうか。

参考文献

秋津村誌 秋津村誌編算委員会

信濃史料第一巻(上) 信濃史料刊行会

高橋桂 北信月夜岳遺跡調査略報

信濃第15巻第3号

高橋桂 魚形線刻画のある土器片

信濃第24巻第11号

拙稿 飯山市、田草川尻遺跡の古式土師器

信濃考古 No.22

桐原健 平安期にみられる山地居住人の遺跡
一志茂樹 信濃と越とを結ぶ古代の幹路
飯山北高等学校地歴部 深沢遺跡研究概報

信濃第20巻第4号
信濃第15巻第10号

Ⅲ 調 査

国道117号線バイパス敷設予定地の中で、松沢芳宏によってすでに確認されている遺跡の地点を重点的に発掘することとした。しかしバイパス敷設予定地域には、すでに千曲商事株式会社の砂利運搬道が敷設されており、それが丁度バイパス敷設予定地の中央部を貫いているために、道路両側で畑となっている地帯を発掘調査することとした。

なお、田草川北側地域は今迄あまり遺物の出土が確認されておらず、分布調査的な意味もこめて発掘調査を行うこととした。結果的にはこの方針が功を奏し、むしろこの地域で重要な遺構及び遺物の発見がなされた。

グリットは全体で166設定した。完掘したグリットは150である。田草川以南の千曲商事株式会社敷設道路をはさんで西側南端をA地区、東側をB地区、田草川に近接する西側をC地区とした。田草川以北でも道路をはさんで東西側にグリットを設定した。東側をD地区西側をE地区とした。

1. A地区

22グリットを設定。発掘を行う。千曲川に向ってゆるやかに傾斜を示す地点である。

基盤となるのは礫混合の黄褐色土層であり、本地区は黒色土層の堆積が発掘地区内で最も厚かった。これはかつてこの付近が凹地となっており、そこに土が流入したためであろう。黒土はこの付近でいう黒ッポに近い状態の土壌である。

地層は表土、黒色土、茶褐色土そして黄褐色土層へと推移するのであるが、黄褐色土層に至るまでに1m内外をはかる。

出土遺物は、(10、5)、(11、6)、(10、7)、(11、8)、(10、9)のグリットで黒色土層に弥生式中期土器破片が出土した。これは他からの流入によるものであろう。(10~11、10~12)のグリットでは、土師器が比較的まとまって出土し、カマドを有する隅丸方形のプランの住居址が完全ではないが検出された。土器はカマド周辺に集中していた。住居址の基盤は地表より80cmほどの深さである。

2. B地区

87グリットを設定。完掘したグリットは82グリットである。この地域は桑畑であったので抜根にブルドーザーを使用した。

この地区は松沢が土器破片を多量に採集しており発掘の重点地区と定めていた。南部のグリットでは表土及び黒色土の堆積は薄く、遺物の出土はほとんど認められなかった。基盤となる黄褐色土層中には人頭大の礫の混入が著しかった。更に北側田草川に近づくにつれて、各グリットでは黒色土層中にも礫の混入が多く認められた。田草川の氾濫の影響であろうか。

遺物が比較的まとまっており、遺構の検出をみたのは、本地区のほぼ中央部にあたる(24~42、5~7)に至るグリットである。

遺構は住居址2、土壇13である。住居址は(25~30、5~7)にかかるものと(37~42、5~7)のグリットにかかるものである。この2つの住居址は道路及び発掘予定地域外にかかっているため完全に検出できなかった。住居址の大きさ、状態については住居址の項にゆずるが大形の住居址であったことと後世の攪乱を受けて壁が途中で消えて明瞭に検出出来なかったことを付記しておこう。時期的には鬼高期に属するものであった。土器の出土は住居址内のものが大部分である。

土壇は(32~35、5~7)の各グリットにかけて集中していた。そしてそれぞれ切り合っている

状態が看取できた。土壙内での出土はほとんど認められず、ただ(32~33、5)にかかる土壙では土壙上面に宋銭が14枚密着して出土した。これが、果してこれら土壙の年代的位置をさし示すものになるのかどうかは速断を許さない。その他では(28、5)のグリットが黒色土層より鉄鏃と思われるものが出土した。(29、7)、グリットより和泉期に属すると思われる高坏が坏部を欠いているが出土した。

3. C地区

表面採集の折に近くで前期縄文式土器破片を得ているので、それをねらって設定した。しかし(40~41、10)のグリットでは地中深く耕起されており、完全に攪乱されていた。

(43、16)グリットの黒色土層下部から底部が丸底に近い形をとるものと思われる早期末乃至前期初頭に位置づけられる縄文式土器破片が出土した。その他では流入したものであろうか、弥生式中期土器破片が2点出土した。

4. D地区

田草川北側の千曲商事敷設道路西側に設定したグリットである。地形的には田草川に向って緩かな傾斜を示している。グリットの西壁セクションをみると表土、黒色土、黄褐色土というように大体推移しているが(109、106)グリット以南では後世の攪乱を受けて完全に層序は乱れている。そして黄褐色土層に至るまでに1mを超えている。調査日誌に記述したとおり(109、105)から以南はかって一段と低くなっており、ブルドーザーによって等平化されたとの古老の話は恐らく真実であろう。

(110~111、105~106)のグリットでは土器がびっしりと集積して、その続きに配石があり、配石に接してが出土した。更に焼土、灰層が認められことからして祭祀遺構とするのが相応しいと思われる。私達はこれを2号祭祀遺構と称することとした。

その他では、(113、106)グリット及び(118、106)グリットで拳大の礫が数個おかれ、その付近から手づくね土器が各一点づつ出土した。また(113、106)グリットでは粗雑な滑石製円盤が1点出土している。これらの遺物はいずれも祭祀遺物であるが、前記した祭祀2号遺構と関係づけられるものなのか否か判然としない。

5. E地区

千曲商事敷設道路の西側に設定した。全部で30グリットを設定した。(116~117、111)を中心にして南北に緩傾斜を示している。地層は表土、黒色土、黄褐色土へと推移している。黄褐色土は山砂と小礫を多量に含んでいる。(127、111)グリットあたりから北に向けて黒色土の堆積が厚くなっている傾向が看取される。この近辺から北にかけて微地形的には谷状の状態を示している。黒色土層中への小礫の混入が非常に顕著であった。(120、116)から(129、111)のグリットでは数点の土器破片が出土したのみで目ぼしい遺構、遺物は見当らなかった。(119、111)グリットでは弥生式中期土器破片が若干出土した。

(114、106)グリット内で礫群が出土し、礫群中に土器破片が比較的まとまって出土した。更に(112、111)にも同様な礫群の検出をみた。この礫群究明のため発掘予定地域外であるが、このグリット西側に1グリットを設定(112、112)して発掘を行ったところ、礫群は設定グリットの中央部付近まで続いており、それより若干離れて長大な河原石が横たわり、両端にはあたかもそれを支えるかのように河原石が置かれていた。そしてその石組付近あるいは河原石の下に円筒状土製品、高坏、甕の破片が存在した。更にこのグリット南壁中に多量の土器破片が含まれていた。従ってこの遺構は祭祀的意味あるいをもつものであろうと結論し1号祭祀遺構と称することとした。(107~110、111)のグリットでは土器破片が少量出土したのみであった。(高橋 桂)

IV 遺 構

1. 住居址

①H-1号住居址 (第4図)

A地区(10, 10)、(10, 11)、(11, 10)、(11, 11)、(12, 11)グリットにかけて土師器の住居址の一部が発見された。プランは一辺約5mの隅丸方形をなすようであり、南東隅には石組カマドが破壊した状態で発見された。現存壁高は20cm前後で、ピットは南壁と東壁の近くに一ヶ所ずつ、そしてカマドの北方約1mのところの一ヶ所認められた。いずれも10~20cmのごく浅いものである。

住居址は地表下60cmの粒子の粗い茶褐色の土層中に掘り込まれたもので、住居址の覆土は暗褐色土層である。暗褐色土層の上層では本遺跡の全体を覆っている黒色土層があり、中期弥生式土器の小破片が若干見られた。暗褐色土層中では遺物が見られず、土師器の一群は床面に密着して発見された。それらは主にカマド内とその付近に集中し、カマド内には土師器とともに若干の須恵器破片が認められた。土師器は甕形土器と坏の破片が主であって、いずれもロクロの成形痕が明瞭である。土師器のうち、あるものはカマドを構成していたかと思われる角礫の下になっており、他の角礫にしても配置が整っていないので、カマドは住居址の廃絶時において破壊したものである。カマド内における焼土は図示した範囲で、約1m×60cmであり、壁より若干内側に入ったところにある。焼土の厚さは10cmであった。

なお、住居址外、(10, 10)グリットのピット(11, 10)グリットのピットは、この住居址とは関係がないものとして扱いたい。

住居址の覆土上層の中期弥生式土器片については傾斜地の上方(西側)からの二次堆積と察知される。(松沢芳宏)

②H-2号住居址 (第5図)

B地区(27,6)(28,6)をほぼ中央にして、その周辺のグリットのいくつかを含めて一辺、9mの隅丸方形プランを呈する住居址を発掘した。

地山を構成している黄褐色粘土層中に掘削され、現存壁高は南壁10cm、北壁15cmである。ただし、粘土層の傾斜のゆえに、西側では壁高が若干高く、東側に移行するに従って、その数値を減じている。

床面は黄褐色粘土層(自然層)そのものを利用して、比較的軟らかであった。住居址の東端部(26,5)、(27,5)グリットでは黄褐色粘土層から+10cmの位置に、黒色土層を若干挟んで貼床と思われる白色粘土層が存在しており、その上に若干の土師器甕破片があった。しかし、白色粘土層のプランが判然としないので、本住居址の床面の傾斜を補うための作為か、また、やや新しい時期における他の住居址の貼床か確証はない。なお甕破片の時期については後述する本住居址内の高坏とやや近い位置にあり、遺物そのものの前後関係からは、上記した問題について判断する訳にはゆかない状態であった。

住居址内のピットについては、P₁、P₂、P₃、P₄が認められた。P₂、P₃は極めて深く、-70cm、-60cmを数えた。この二つは支柱穴と判断されよう。また、P₁は-10cm、P₄は-20cmのごく浅いものであった。(29,7)区の隋円形の落ち込みは、その形状から土壇とするのが妥当である。本住居址造成以後における掘り込みと判断されよう。

本住居址内の遺物については、(29,7)グリットの壁より50cm内側において、床面より、坏部

の一部を欠く高坏がすわったままの状態で見られ（第10図1）、（27、7）グリットの床面に密着して高坏の脚部（第10図2）が発見された。それ以外にはとりたててめぼしい遺物はなかった。

覆土中の遺物としては、（28、5）グリット内の床面上+10cmのところから鉄滓、（第15図2）、（25、7）グリットの住居の壁の上層+20cmから鉄製品（第15図4）が出土し、また若干の土師器破片（和泉式～鬼高式）が見られた。

なお、本住居址は推定住居範囲の $\frac{3}{4}$ を発掘したにすぎないため、カマドまたは炉址の位置が判然としなかったことは残念である。（松沢芳宏）

③H-3号住居址（第6図）

B地区、（39、6）、（40、6）グリットの周辺に、やはり一辺約9mの隅丸方形プランの住居址の一部が発見された。黄褐色粘土層の最上面にやっと住居址の床面が到達している程度で壁高はほとんどない。従って本住居址のプランは住居の縁をめぐる浅い周溝によって判断した。周溝は西方、つまり斜面上方に向うにしたがって深く、また広がっている。周溝の幅は広い所で30cm、狭い所が10cmで、深さは深いところで10cm、浅いところは僅かにそれと判明する程度であった。また、（40、6）グリット内では周溝とT字形につながる長さ約2m、幅15cm、深さ5cmの溝が発見された。床面は東方にやや傾斜し、黒色土の混入した粘土の貼床となっていて、非常に堅緻であった。

ピットはP₁～P₉まで認められ、そのうちP₁とP₂は主柱穴と思われるもので、P₁は径70cm、深さ47cmであり、P₂は長径90cm、深さ20cmの楕円形のピット内に、さらに径30cm、深さ35cmのピットを穿つ二重の掘方をもったものである。また二次ピットの外縁にあたり、一次ピットの上面にあたる所には、径40cm大の角礫が4ヶ見られた。これは柱の根固めとして用いられていたものであろう。P₃～P₆は周溝の外側に並ぶ小さなピットであり、ほとんど垂直である点に注意したい。その深さはP₃—10・P₄—7・P₅—5・P₆—30cmである。他はすべて住居址内のものでP₇—15cm、P₈—12cm、P₉—17cmであった。

（39、6）、（40、6）にかかる落ち込みは貯蔵穴と思われるものであり、長径1m30cmの楕円形を呈し、深さは—40cmであった。底の形状は、緩やかな半球状をなしていた。外縁と内部には人頭大、またはそれ以上の角礫がみられ、土器も多数検出された。主な遺物は完形に近い埴（第16図10）、高坏の脚部破片（同図7、8）、甕口縁部破片（同図1、3）などである。このほかに床面直上においてP₁とP₂の柱穴付近において、甕口縁破片等が若干発見されている。また、（38、7）グリット内の床面では皮状炭化物多数が床面より発見されたが性格不明である。のちの分析を待ちたい。

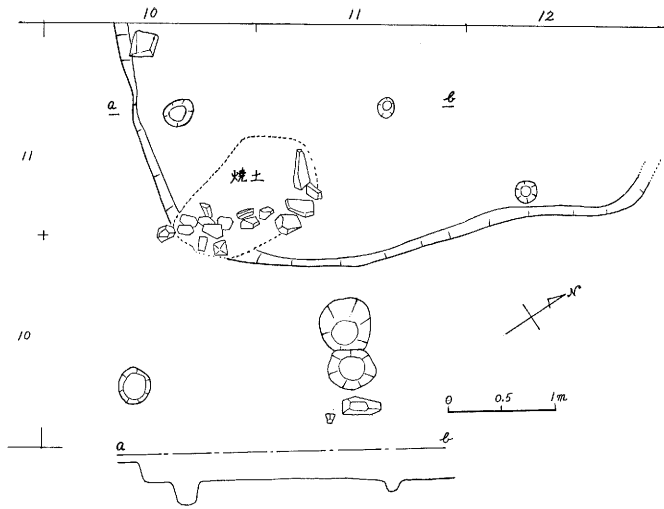
なお、本住居址の覆土は他と同じく黒色土層であり、覆土中からは西方からの遺物の二次的移動によるものと思われる縄文式前期、弥生式中期の土器片が少々認められている。（松沢芳宏）

2. 土 壙（第7図）

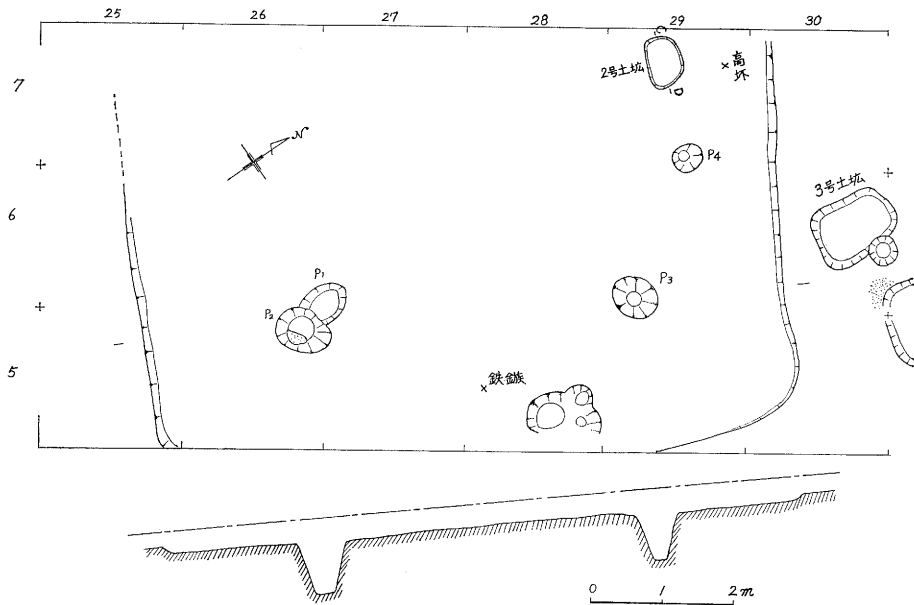
B地区のH-2号住居址、H-3号住居址の中間地域を主体に、H-2号住居址上またはそれ以前において土壙群が発見された。いずれも黄褐色粘土層中に掘り込まれたもので、それらを南から順序をおいて、1号～13号まで名称をつけた。

1号土壙

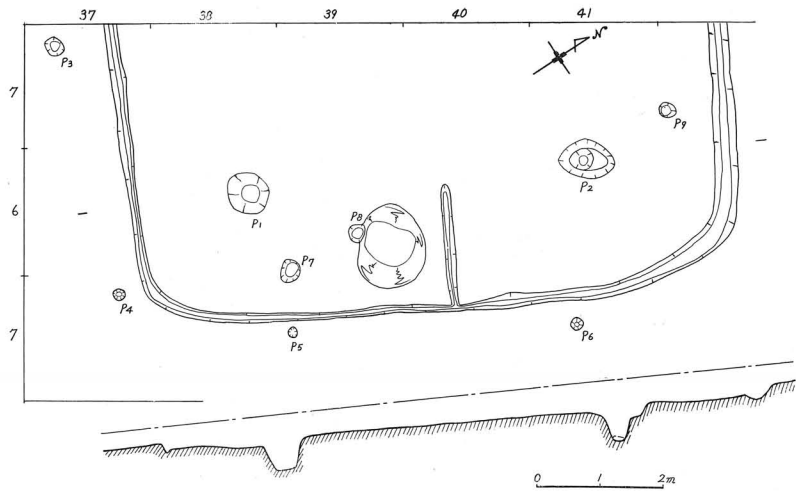
1m10cmの直径を測る円形の土壙である。現存壁高は—20cmで、壙底は水平であり、内部には黒色土が充満していたのみである。



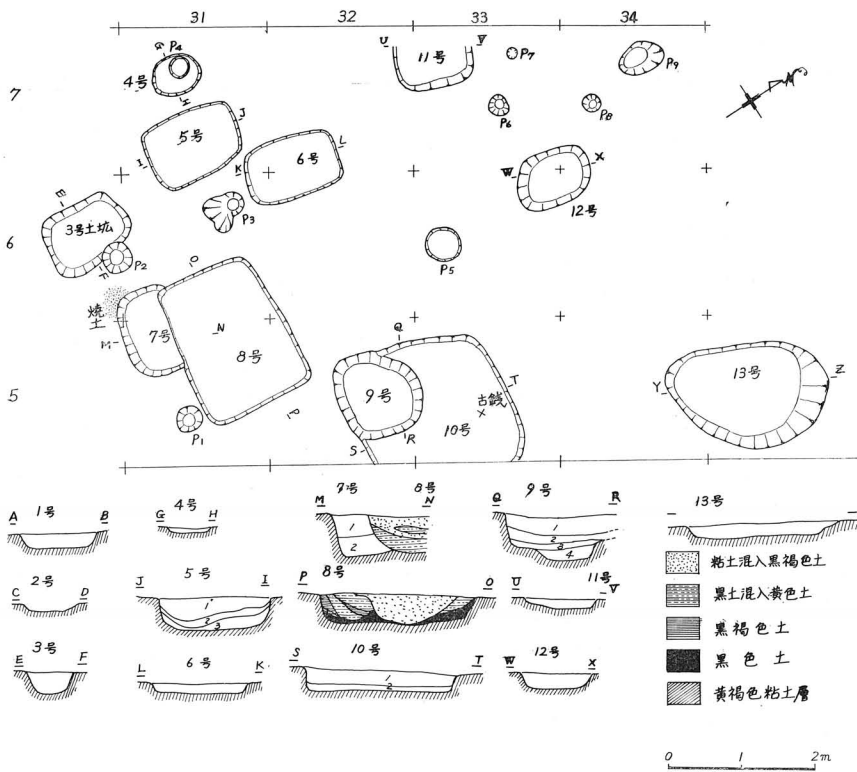
第4图 H-1号住居址实测图



第5图 H-2号住居址实测图



第6图 H-3号住居址实测图



第7图 土壤群实测图

2号土壌

H | 2号住居址の北壁近くの床面を掘り込んでいて、70cm×50cmの楕円形のプランを呈し、現存壁高は10cmである。墳底は浅く窪んだ状態で、内部には粘土の混入した黒白土が充満していたが、遺物は何も発見されなかった。

3号土壌

1 m30cm×80cmの隅丸長方形プランを呈し、墳底の形状は船底状をなしている。墳内には粘土の混入した粒子の粗い黒褐色土層が充満していたのみである。

4号土壌

70cm×55cmの楕円形をなし、現存壁高は0.7cmで、墳底は水平であった。墳内には黒色土が充満し、それを取りのそくと、さらに直径25cm、深さ35cmのピットがあり、黒色土が入っていた。

土壌表面の黒色土層面の観察では、墳底に穿たれたピットの外形が現われていなかったのもので、土壌よりもピットの方が先に掘られたものと判断される。従ってピットと土壌との関連はないものとして扱いたい。

5号土壌

1 m30cm×90cmの隅丸長方形プランをなす壁高は50cmで墳底の形状は船底状をなしている。墳内における土層は次に記すとおりである。第一層、粘土混入黒褐色土層。第二層黒色土層。第三層、黒褐色土層。なお遺物は何も発見されなかった。

6号土壌

130cm×90cmの隅丸長方形プランを呈する。壁高は15cmで底面は水平であった。墳中には若干の小礫を含有する黒色土が充満していた。遺物は何も発見されなかった。

7号土壌

長軸120cm、短軸の長さは8号に切られている為判明しない。隅丸長方形プランを呈し、壁高は60cm数える。墳内の土層は二層に分ち、第一層が粒子の細かい黒色土層で厚さ30cm、第二層が砂質茶褐色土層で厚さ30cmとなっている。遺物は発見されなかった。

なお第7図に見るように、土壌の北端部分は8号によって切られている。また西端に接して黄褐色粘土層直上に焼土が認められ、焼土の一部は本土壌によって切られており、土壌よりも焼土の方が古いことが判明した。

8号土壌

長軸200cm、短軸150cm、壁高40cm、隅丸長方形プランを呈し、墳底は水平であった。墳中の土層に分ち得るが、整然とした層序をなさず攪乱されていることが特色である。第13図にしたがって土層の名称を次に記述する。第一層、粘土混入土層。第二層、黒色土混入黄色土層。第三層、黒褐色土層。第四層、黒色土層。遺物の発見はない。

9号土壌

径1mの不正円形を呈する。第10号土壌によって本土壌が破壊された状況をとっている。内部には黒色土層が充満しているのみであった。

10号土壌

200cm×200cmの不正隅丸方形をなす。現存壁高は30cmで9号土壇の上部を切っている。壇内の土層は第一層として細礫の含有した黒褐色土層が約20cmの厚さに堆積し、第二層として黒色土層が10cmの厚さに堆積している。9号土壇上では本土壇との接点のあたりに黄褐色粘土の薄いバンドが入っている。

第一層の黒褐色土層中では、上から5cmのレベルで、土壇中央からやや北寄りに位置して古銭14枚が発見された。14枚すべて密着しており、孔に葉状の炭化物が残存していた。

11号土壇

隅丸方形か長方形のプランを呈すると思われるが、土壇の一端が発掘区域外に延びていて、判然としない。現存壁高15cm、壇底は比較的水平的な状態であった。内部には黒色土が充満しているのみであった。

12号土壇

長軸100cmの楕円形プランを呈する。現存壁高は25cm、内部には粘土粒子の混入した黒色土が入っており、底面より+15cm浮いたレベルに鬼高式土器の特徴である長胴形を呈する甕破片が15ヶ程度発見された。土器片は焼成具合や櫛目痕、胎土などから同一個体と判断されるものであるが、破片が足りず復元することはできなかった。

13号土壇

長径230cmの卵形プランを呈する。壁高は20cmで北東壁は緩やかに傾斜している。底面は水平で南側がやや低い状態であった。内部には細礫を含む黒褐色土層が入っていたのみであった。

(32.5)、グリット周辺の土壇群とピット群の切り合いについて

前項で記した土壇群の他に、第13図に示すようにピット群が発見されている。その深さはP₁—30cm、P₂—15cm、P₃—29cm、P₄—35cm、P₅—32cm、P₆—23cm、P₇—15cm、P₈—25cm P₉—20cmで、そのうちP₄は7号土壇より古いことは先に記したとおりである。P₂と5号土壇の前後関係は不明である。P₅の最上面には比較的古式の土師器（和泉期～鬼高期の古い時期）の高坏破片がややまとまって出土した。

これらのピットは住居址の柱穴とすべきかまた他の性格を与えるべきか定かではない。

土壇総括

以上、土壇とその付近に散在するピットについて概略を記述してきた。ここでその性格や問題点などを簡単に記述してみよう。

土壇のプランについては円形を呈するもの2、楕円形4、隅丸方形乃至長方形7を数え、約半数が長方形乃至方形の隅丸形の整然としたプランを呈していることがわかる。

壁高については、10cmの浅いものから、60cmの深いものも認められる。概して大形土壇は壁高が高く、小形土壇は壁高が低い。なお、現存壁高は土壇が掘られた当初の壁高にはならないことを付記しておきたい。現存壁高は土壇の黄褐色粘土層面に達した部分についてのみの数値であり、上部を耕作による削平などによって失っている点を強調したい。ちなみに土壇群が発見された地域は黄褐色粘土層が現地表面に最も近いところである。

大きさについては長軸100cm～200cm、短軸80cm～150cmが普通である。土壇内部を満たしている土質については、黒色土層のみのものと、粘土混入黒褐色土の充満するものの二ケースがうかがえる。粘土混入黒褐色土の充満している土壇についても、下層に黒色土が入っている点に注意し

たい。

墳内に残された遺物については、ほとんどの土壙は遺物を残さないものであるけれども、10号土壙と12号土壙のみ、若干の遺物の出土を見た。10号土壙内出土古銭14枚はその年代を後章で記するように、中世に比定できる有力な根拠となった。また、12号土壙からは長胴形甕形土器の破片十数点が出土し、その土壙の時間的位置を鬼高期に位置づけることが出来た。その他の土壙については、時代を判定する決手が無い。しかし前記二つの土壙が古墳時代と中世である点、他の土壙についても、おそらくは古墳時代とそれ以後のものが重複しているものと想像される。

最後に土壙の性格については、10号土壙は古銭が埋置されていることから土壙墓である可能性が強い。また12号土壙の土器片の遺存状態は安源寺遺跡で検出された弥生期の土壙（註1）の系譜を引くものと思われ、安源寺遺跡の土壙を土壙墓と考えれば、本土壙も土壙墓と考えねばならないだろう。しかし、墓とするに相応しい積極的な証拠がない以上、断定はさけておきたい。その他の土壙についても形状や大きさから土壙墓である可能性はあるが断定はできない状態である（松沢芳宏）

（註1）「海戸、安源寺」長野県考古学会研究報告書2

3. 祭祀遺構

① 1号祭祀遺構（第8図）

E地区（112、111～112）のグリットにかかる遺構である。祭祀2号遺構とは千曲商事敷設道路をはさんで6mほど距てた位置に存在している。（112、111）グリットの発掘に際して礫群を発見し、その礫群の追跡をするためバイパス予定地域外ではあるが、地主の猪瀬宏氏の許可を得て西に1グリット拡張（112、111）したところ検出した遺構である。

長大な河原石（長さおよそ65cm）を横たえ、両端にはあたかも河原石を支えるかのように河原石を配置している。この河原石の石組の下部及び周辺に土器が出土した。横たえた河原石の東側下部に円筒状土製品が、若干離れて高坏脚部破片が認められた。また西側では河原石に接して甕形土器が逆さまになって出土した。河原石の北東には若干の土器破片が存在した。発掘の所見によれば、本グリット南壁中に夥しい土器破片が存在したことが確認されている。従ってこのグリット南側の（111、112）に相当するグリット内には祭祀2号遺構と同様に土器群が検出される可能性はきわめて高いものと推定される。発掘予定地域外ではあり、かつ日程の関係上その確認を断念せざるを得なかった。

さて、長大な河原石を中心とする配石遺構の東側にはおよそ2mほどの不正円形状の広がりをもった礫群が存在していた。礫は拳大ないしそれよりは若干の大きさもつものであり、びっしりと敷き詰められていた。そして中央部で若干盛りあがる傾向を示している。この礫群が、長大な河原石を中心とする配石遺構とどのような関係を示すものかは判然としないが、密接不離な関係にあることだけは事実であろう。なお、礫群中に若干の土器破片が混在していた。礫群は一層のみで厚くなく、その下部は田草川の河床礫となっている。

なお、北に1グリットにおいて、（114、111）のグリット内にも同様な礫群中土器破片が介在していた。ただこの礫群が、1号祭祀遺構の礫群と関連づけられるものなのかどうかは判然としない。

② 2号祭祀遺構（第9図）

D地区で検出された遺構である。田草川より15mほど距てた地点に位置する。（110～111、105～106）のグリットの範囲内に存在する。

遺構は土器群と石組よりなりたっている。土器の出土状態は使用した土器をそのままおいたもの

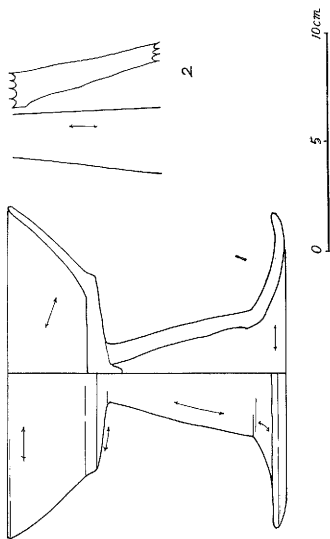
が倒れて重なり合ったという状態で、出土状態から観察する限りにおいては、使用済みの土器を投げ捨てたとういような状態には見受けられなかった。同一個体が、それほど遠くに散在せず、ほぼ器高が横倒しになった範囲内に集積していたこと、坏がほとんど完形で二枚重ねの状態出土したことなどがそれを証拠づけているといえよう。ただ、出土土器が、坏を除いては完形品はなくことごとく欠損していることを考えると接合の際における技術的欠陥は多分にあるにしても、何等かの目的をもって打ち欠いたと考えた方がよいのかも知れない。更に坏のあるものは、一部を意識的に欠いたかあるいは、最初から欠損せしめるがごとき状態で製作している状態のものが存することからしてもそう考えた方がよいように思われる。

これらの土器群に続いて大小の河原石が配置されている。大きな河原石はやや間隔をもって配置され、その間に若干小さな河原石をおいている。土器の出土はこの石組みの場所では著しく少なくなっており、河原石の間に破片が介在するのみであった。しかし特記しておかねばならないことは配石遺構の場所から が出土したことである。 は大きな河原石に接して横転した状態で出土した。出土層位は黒色土層中であり、土器群のレベルよりやや上位であった。しかし、配石の上部面より下部であり、あたかも石の上へのせられたものが何等かの機会に落ちたものとも考えられないことはない。いずれにしても配石遺構とほぼ同層位であることなどを考慮するならば、本遺構に関連する重要な遺物であるといえよう。換言すれば配石遺構が土器群と密接な関係を有するとするならば、 は同一遺構の出土遺物として扱ってしかるべきものといえよう。

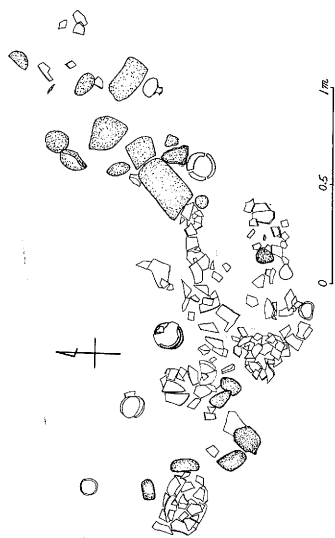
配石がきれた場所には、若干の小礫と土器破片が散在し、同時に焼土と灰層が認められた。また、土器群西端にも焼土と灰層が僅少ではあるが認められた。従って土器群と配石、焼土、灰層、

という一連の事象からして該遺構は祭祀遺構と認めざるを得ないのである。土器群の下層には何等の施設も認められなかった。基盤である黄褐色土層中に干若の凹をもっているにすぎなかった。

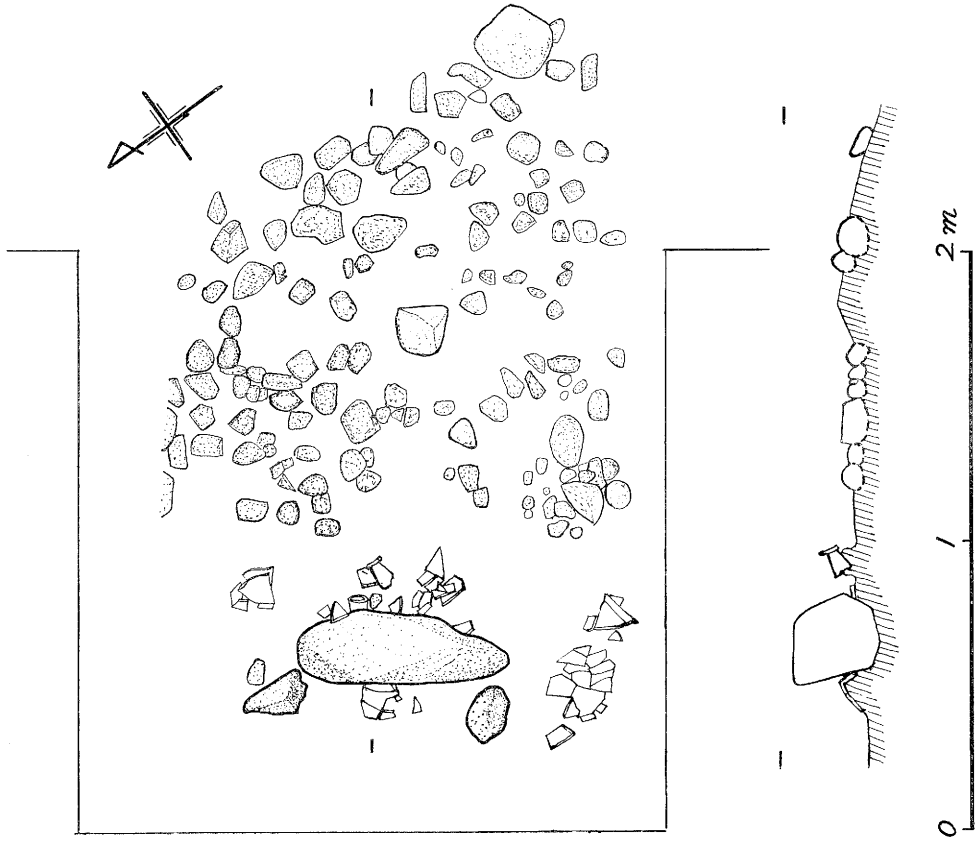
なお、付記しておかねばならないことは、本遺構ではないが(113、106)、(118、106)グリットから手捏土器が各1点ずつ出土している。また、(113、106)グリットから滑石製円盤が1点出土している。果してこれらの遺物が、この遺構に関係を有するものであるのか、あるいは無関係であってその付近に同様な遺構が存在するものであるのかは残念ながら究明できなかった。(高橋桂)



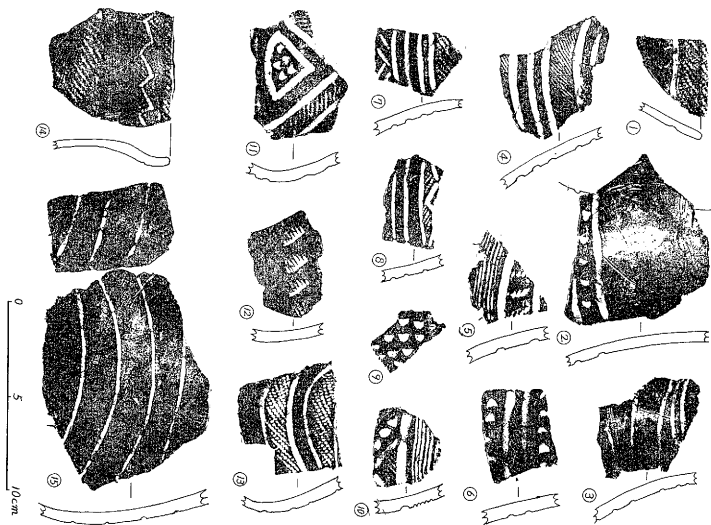
第10图 H-2号住居址出土土器



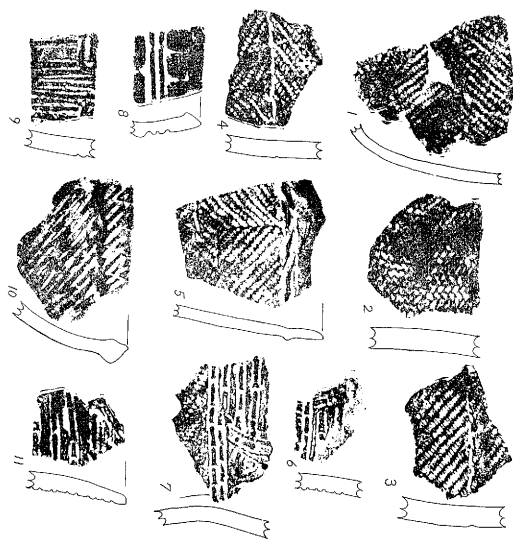
第9图 2号祭祀遺構実測図



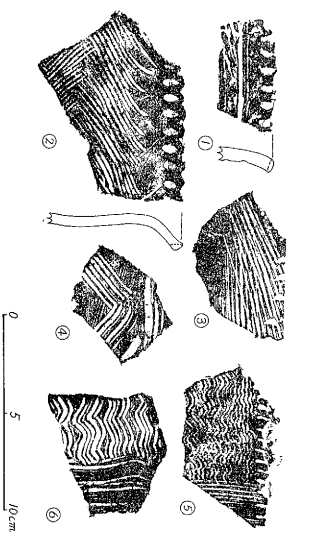
第8图 1号祭祀遺構実測図



第11图 绳文式土器拓影



第12图 弥生式甕形土器拓影



第13图 弥生式甕形土器拓影

V 遺 物

1. 縄文式土器

全部で10数点出土しているだけである。そのうち拓影として使用でき得るのは図示したものだけである。

これらの縄文土器はいずれも混入したものである。B地区及びE地区でほとんど出土している。

時期は、前期及び中期に属する破片であって、1～7までが前期の所産である。1はC地区から出土した土器片で、縄文だけの施文土器である。底部近くの状態から判断すると丸底を呈するものようである。器壁内に若干の繊維を含んでいる。前期初頭に位置するものであろうか。2は神の木式に相当する土器であろう。6～7は同一個体の土器であって口縁部に竹管工具による施文をなし、以下に縄文を施している。南大原式土器であろう。

3～5は羽状縄文を施した土器であって有尾式に属するものを解してよさそうである。器壁中に繊維を含んでいる。8～11は、中期初頭に属する土器であろう。(高橋桂)

2. 弥生式土器

調査の項で触れたように、土師式住居の覆土中やグリットの包含層中から若干の中期弥生式土器破片が発見されている。これらの土器片は斜面上方からの二次堆積と思われるもので、プライマリな出土状態を示すものは一点もなかった。遺物は壺形土器と甕形土器の二種に大別できる。

壺形土器 (第12図)

口縁部破片では1と14の二点がある。1は口唇部に複節の斜縄文を押捺し、以下、外表面に一条の太めの沈線を横走させ、沈線と口唇部の間もまた複節の斜縄文でうめている。口縁部形態はゆるく内湾しながらも相対的には朝顔状に外反した形をとっている。14は口縁部が立ち上り、翼面を構成した部分に篋描山形文をめぐらしている。口唇部と翼面には、やはり複節斜縄文(以下、本文中では縄文とする)が地文として施されている。1は(15、11) 14は(119、112)グリット発見のもの。

頸部では竹管の背面を利用した沈線文が数条にわたって横走する例が多い。4、6、7は横走する沈線文の間を一部磨消縄文としたもので、6は竹管工具の端部を用いて半月形刺突文を磨消縄文帯の上に点列させたものである。7は上腹部に移行する部分に重山形文を沈刻したものである。2は無文帯を多く残した下方に竹管工具による沈線文が横走し、沈線文の間に半月形刺突文が、点列しているものである。形態としては長く、そしてやや細く立ち上っていることが特徴である。3はやや無造作に沈線を横走させている。5は沈線文の間に櫛描直線文が横走し、また櫛状工具の端部を利用して刺突文を点列させている。2は(11、10)、3はH～2号址覆土中、4は(9、10)、5は(10、11)、6は(40、11)、7は(10、11)グリット発見のものである。

上腹部については頸部から連なる横走する平行沈線文に変わって、重山形文や連弧文からなる種類が多い。8は上腹部から頸部にかかる部分に山形文を配したもので、地文に縄文を押捺している。13は縄文を地文とし、下方に垂れる連弧文を配し、一部を磨消縄文としたもの。15は上方に張る重連弧文をやや軽く描き出している。10、11は半月形刺突文を重三角形文内の磨消縄文帯部分に配したものである。半月形刺突文が多用された9もある。12は櫛状工具の端部による刺突文の連続したものである。8は(7、10)、9は(6、11)、10は(7、10) 11は(10、11)、12は(10、10)、13は(11、11)、15は(119、112)グリット中の包含層出土土器である。

甕形土器 (第13図)

1は砂粒を含む黒褐色の堅い焼成で口唇部に深い刻みを点列させ、外表面に禾本科植物の茎による粗い条痕を横走させている。口縁の外反度が少なく、甕というよりも深鉢に近い形態をとるものであろう。2はやはり口唇部に篋先による深い刻みを点列させ、以下、羽状の条痕を施したものである。条痕は禾本科植物の茎を数本組合せた櫛状工具によるもので、1よりもやや軽く描かれている。器形は口縁の外反度が強まった完全な甕である。3は櫛描条痕上の半月形刺突文を点列させたものである。4は横走する櫛描条痕の下方に山形の櫛描条痕を組合せている。5、6は横走する櫛描波状文の一部を縦走する櫛描条痕によって立ち切っている種類であり、5はその一部に篋先による刺突文を点列させている。1は(41、11)、2、3は(7、10)、4は(14、11)、5は(9、10)、6は(10、10)グリット出土のもので、すべて包含層中から出土している。

以上、壺形土器は栗林第三類(註1)に含まれるものが多い。しかし14のように翼状口縁の形態がやや退化した現象を見せるものや、15のごとき上腹部における重連弧文が簡素化した現象をとっているものなどがあり、一応、栗林第三類に含めたものの、その中にも若干の時間差があることを指摘しておきたい。

甕形土器①は飯水地方では未だ発見されていない種類で、東海地方の影響下における条痕文土器と考えられ、南信の庄ノ畑第四類(註2)に親縁性が求められるものであるが、本例に伴なう壺形土器の破片は今回の調査では発見されていない。2、3、4、5、6については、栗林第六類に含まれるものであろう。

つまり、ここにあげられた資料は1をのぞいて、桐原健氏のいわれる栗林式土器に相当するものと思われる(註3)。(松沢芳宏)

(註1) 桐原健「栗林式土器の再検討」考古学雑誌第49巻第3号

(註2) 藤森栄一、他、「岡谷市庄之畑遺跡」松本諏訪地区新産都市地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告、長野県考古学会研究報告書1

(註3) 註1に同じ、

文中で桐原健氏は「中期終末期の百瀬式土器に先行し、第二次発掘資料の分類に基く、第二類、第三類の壺形土器、及び第五類から第七類に亘る甕形土器とて構成されている型式を栗林式土器として理解すべきであると考えに至った。」としている。

3. 古墳時代および歴史時代の遺物

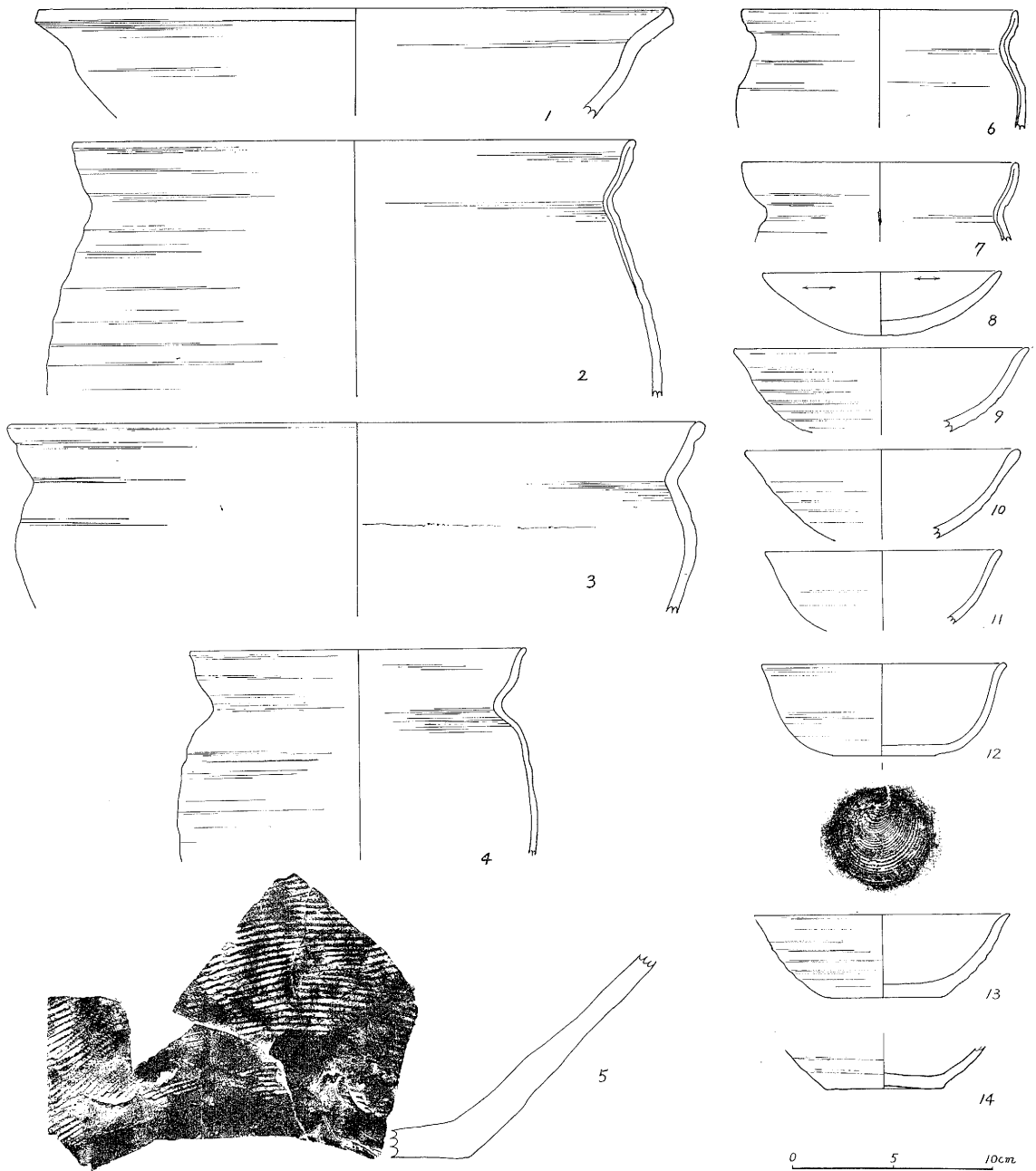
① 住居址内出土遺物

H-1号住居址出土遺物

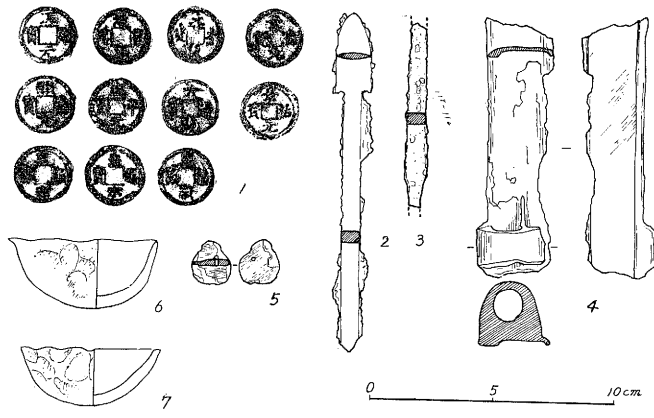
本住居址からは土師器と須恵器が発見されている。土師器の器形の判明する資料は12点で須恵器は僅かに2点を数えたのみである。ここに記述する資料はすべて床面直上とカマド付近に存在していたもので、一括資料として把握してよいものである。

甕形土器 (第14図2~7、その内5は須恵器)

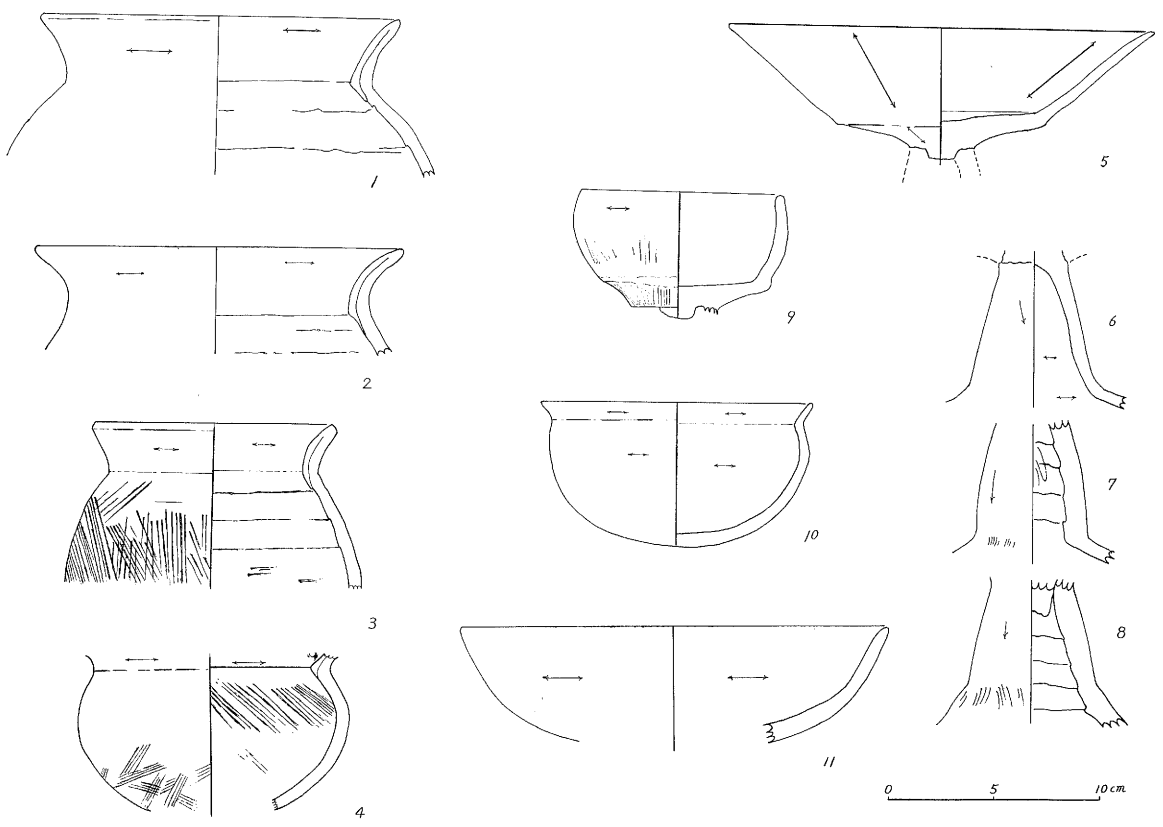
2、3は大形の甕形土器で、いずれも口縁端部が内湾の傾向をみせながらも「く」の字形に外反している。2は頸部以下、胴部に至るまで比較的ゆるいカーブでふくらんでいる。断面を見ると内側に折り返された粘土帯が、非常に長く尾をひいていることがわかった。外表面はロクロ成形痕が明瞭であり、器面の凹凸が著しい。焼成良好、黄褐色を呈し、胎土は比較的緻密である。3は最大腹径を高くおいて次第に底部に向かって収約してゆく器形をとるものであろう。口縁から頸部に向け



第14图 H-1号住居址出土土器实测图



第15図 グリット出土各種遺物



第16図 H-3号住居址出土土器実測図

て外表面はロクロ成形痕が明瞭である。黄褐色を呈し、やや砂粒を含んだ堅い焼成である。

4、6、7は口縁の立ち上った小形の甕で頸部でやや丸みをもってくびれ、以下やや肩の張った器形をなしている。いずれも外表面はロクロ成形痕が著しい。6は砂粒を含み、4、7は良く選ばれた精良粘土を用い、いずれも黄褐色の堅緻な焼成である。6、7の断面を観察すると、内側に折り返された粘土帯が長く延びていることがわかる。

鉢形土器 (第14図1)

口縁部破片のみのため、いかなる器形をとるのか判然としないが、一応鉢形とした。口唇部は斜めに断ち切られていて切出し状の断面をとる。やや下ったところで若干内側にくびれ、以下下方に向けて収約してゆく器形をとっている。外表面にはロクロ痕が僅かに残る。黄褐色をなし、焼成良好である。

坏形土器 (第14図8~14)

8は丸底の珍しいもので、やや古い様相を残しているのかもしれない。外表面口縁部付近においては横手で、内部では横方向の篋研磨の痕跡が認められ部分的に炭素が吸着して黒色をなす。外表面は灰褐色で焼成不良、ザラザラした感じである。

9、10、11はいずれも底部を欠いた破片であって、全体的には内湾の傾向をみせながらも、口縁端部が僅かに外反する形態をとっている。10は外表面にロクロ成形痕を残し、内面は調整器具を判断することが出来ないほど研磨がゆきとどいている。焼成良好で赤褐色を呈する。9、11は内面に炭素が吸着して、黒色の光沢を放っている。外表面はいずれもロクロ成形痕が明らかであり、焼成良好で黄褐色を呈している。

12 13は糸切底を有しているもの。12の内面は良く研磨されているが、炭素の吸着はみられない。外表面はロクロ成形時の指頭による擦痕が僅かに見られる程度である。焼成良好、黄褐色を呈する。13は外表面にロクロ成形痕を顕著に残し、内部はよく磨かれていて、全面に炭素が吸着し、黒色の光沢を放っている。焼成良好で外表面は黄褐色を呈している。12 13件にやはり口縁端部がやや外反した形態をとっている。12は器高が高く、碗に近い形態のものである。

14は須恵器の底部破片で糸切底を有し、内外面ともにロクロ成形痕が顕著である。青灰色の堅い焼成である。

以上、本住居址の土師器の成形にあたって、甕、坏形土器のいずれにもロクロが使われており、坏形土器の底部は糸切底を有するものが多く、内部に炭素が吸着し、黒色の光沢を放つものが多い。坏形土器の中で、高台の付いた種類が見当たらないのが不思議であるが、これは住居址の一部を発掘したにすぎない為の現象であるのか、あるいは、まだ高台の付かない段階にあるのか定かではない。

これら土師器の様相は関東の国分式に該当し、県内では平出第五様式(註1)に比定できるものであろう。(松沢芳宏)

(註1) 「平出」平出遺跡調査会編

Ⅱ-2号住居址出土遺物 (第10図)

本住居址内で床面直上発見の遺物で器形をうかがうことのできるものは次に記す2点の土師器のみである。

高坏

1は赤褐色で、焼成良好。脚部の外表面、坏部の全面に亘って篋整形がなされている。図示した矢印は篋整形の方向を示している。脚部と坏部の接合部分には坏部から突出した「脐」がみられ

る。坏部はシャープな段をつくって内湾の傾向をみせながら外傾し、口唇部は丸みをおびている。脚部はやや中膨みの形をとって立ちあがっており、裾は急激に広がってラップ状の形態をとっている。脚部の内部は指頭による整形がなされていて比較的なめらかである。ラップ状に開いた不底部は指頭による横なで整形がみられる。

2は脚部の破片である。赤褐色を呈し、焼成良好である。外表面は縦方向の篋研磨が行なわれている。

以上、高坏のみの形態から、本住居址の遺物の時期を判断することは危険であるが、一応、高坏の形態は関東地方の和泉式土器に親縁性が求められるものである（松沢芳宏）

Ⅱ— 3号住居址出土遺物

すべて床面直上と貯蔵穴内より発見されたもので、当然、一括資料として把握してよいものである。

甕形土器（第16図1～3）

1は口縁が「く」の字形に外反し、胴部が球形をなすものであろう。粘土を内側に折り返した形跡が認められる。口縁と胴部が接する部分の内側では稜を有している。内部の観察では輪積の痕跡が認められる。外表面の口縁部と胴部の接する高さまで、内側の口唇部から若干下った高さまで、それぞれ横なで整形が行なわれている。黄褐色を呈し、砂粒を含んだ胎土で、焼成は良好である。

2は口縁が緩やかに外反する器形であり、胴部は長胴形を呈するものようである。やはり内側に粘土が折り返され、口縁部と胴部の接する部分の内側では稜を有している。1と同様、輪積の痕跡も認められる。口縁部の内側と外側では刷毛状器具による横なでが行なわれている。黄褐色で砂粒を含み、焼成良好である。3も長胴形を呈する器形で、粘土を内側に折り返し、胴部内面には輪積痕が観察される。1、2と同様、口縁部の内外面に刷毛状器具による横なで整形が行なわれ、胴部の外表面には粗い櫛目が縦方向に雑然とした状態で走っている。色は黒褐色で焼成は堅緻であるが、胎土は砂粒を含んだ粗雑なものである。外表面の所々に煤が付着しており、明らかに煮沸の甕であったことを思わせる。

鉢形土器（第16図4）

口縁部と底部を欠く破片で、あるいは台付の鉢であったかもしれない。口縁の上部を欠損してはいるけれども、おそらく短かく外反した口縁を有していたものであろう。口縁の残存部分の観察では粘土を内側に折り返した痕跡が認められる。胴部の内外面の一部に刷毛目がある。内外面ともに煤が付着し、胎土に砂粒を含み、焼成良好、色は黒褐色である。

高坏（第16図5～9）

5は坏部の破片である。下底部にぶい稜線を有して、次第に外傾してゆく口縁部形態をとる。口唇部はやや外反し、丸みをおびている。下底部中央には脚部に挿入された「臍」が突出している。内外面ともに縦方向の篋磨きが行なわれており、精良な胎土で、暗褐色を呈し、焼成良好である。

6、7、8は脚部の破片である。いずれも精良粘土を胎土にした焼成良好なもので、外表面には縦方向の篋磨きが行なわれている。7、8は内部に巻上げ法の痕跡を残す。外表面は篋磨きの前段階として、櫛状工具による整形がなされたものと思われ、一部にその痕跡をみせている。6の内部は指頭による整形がなされている為、巻上げ法の痕跡をうかがうことができない。

9は、従来発見されている高坏の概念には合致しないものであるけれども、下底部には脚部に挿入された「臍」が残っており、明らかに脚部を有したものと考えられよう。壙状の坏部形態をもつ

た特異なものである。暗褐色の堅緻な焼成であるけれども、胎土は粗悪である。外表面には櫛目痕を残す。口縁外表面には刷毛状工具による横なで整形が行なわれており、その部分は櫛目痕が消滅している。

① 壙 (第16図10,11)

10はほぼ完形である。僅かに外反する低い口縁をもち、半球形の胴部を有する丸底の壙である。内外面ともに口縁部は横なで整形、胴部は横方向の篋研磨が行なわれている。胎土は良好で、赤褐色の堅い焼成である。11は口縁部から胴部に至る破片で、口縁の外反しない器高の浅い丸底の壙である。口縁部の径はかなり大きなものである。内外面ともに刷毛状工具による横なで整形が行なわれている。

以上、本住居址内出土遺物の中には古い要素と新しい要素をもつものが共存している。甕は1のように球形の胴部を有するものから2、3のようにやや長胴形をなすものの二種があり、高坏においては、和泉式土器に親縁性が求められる古式の様相をおびているものが多い。壙については10のようにやや古式に入れてよいものから、11のように鬼高式土器によくみられる特徴を持ったものである。

したがって、本住居址の土師器の様相は、和泉式から鬼高式の移行期の段階にあるものとみてよいものであるが、その時間的位置は鬼高期の古い段階に与えられるべきであろう。(松沢芳宏)

② 土壌内出土遺物 (第15図)①

土拡群中遺物の存在したものは10号と12号のみである。12号は図上復元不可能な鬼高式土器甕破片若干、10号は古銭14枚が発見されている。

古銭は表面が磨滅して文字の判読不可能なものと、開元通宝をのぞいて、その多くが北宋銭であり、それに南宋銭が一枚加わっている。以下、次の銭貨名と初鑄年代をあげてみよう。

開元通宝、唐高祖、621年(西暦)		
咸平元宝、北宋真宗	998	
景德元宝	〃	1004
景祐元宝、北宋仁宗	1034	
皇宋通宝	〃	1039
		3枚
元豊通宝、北宋神宗	1078	2枚
大観通宝、北宋徽宗	1107	
淳熙元宝、南宋孝宗	1174	
不明		3枚

このうち初鑄年代の最も古いものは、開元通宝(621年)で、最も新しいものは淳熙元宝(1174年)である。しかし、これは初鑄年代であるから、そののちの数年の鑄造を見込み、また日本に輸入され、当該秋津地区にまでも流通する時間差も換算して、14枚が埋置された時期を、中世に比定してよいものと思われる。(松沢芳宏)

参考文献 日本考古学辞典

日本考古学協会編

③ 祭祀遺構出土遺物

1号祭祀遺構出土遺物(第17図)

長大な河原石を中心とする配石遺構の下部及びその周辺から出土したものであって土師器のみである。器形的には甕、高坏、円筒形土製品に分類できる。以下、器形別にのべていきたい。

1. 甕形土器

②は、胴部下位において最大径を有し、丸味をもちつつ底部に収約されている。感覚的にはどしどしとした感じをあたえる土器である。口縁は外反度が少なく、頸部の収約度は小である。従って頸部からそのまま肩部へと若干の膨みをもちつつ移行する。荒い刷毛目が頸部から底部に向かって縦に施されている。口縁部には、細かい刷毛目を横走りさせているが、あまり判然としたものではない。色調は灰白色を呈する。焼成は比較的堅緻だが、全般的には粗雑な製作の感をあたえる。①は頸部はやや収約し肩部から胴部にかけて膨みをもち底部へといたっている。最大径が胴部上半にあり、不安定な形状を呈する。色調はややくすんだ灰白色を呈する。焼成は堅緻である。④は口縁が外反している。肩部から底部にかけて著しく丸味をもち、全体的に球状を呈する。底部も比較的大きくどしどしとした感じのする土器である。色調は赤褐色を呈する。③は口縁部が若干外反し、胴部はあまり膨みをもたずスムーズに至っており、スマートな形状をとる。頸部から底部にかけて、ほぼ垂直に刷毛目を施している。内部は頸部から底部にいたるまで、横走る櫛状工具によって整形されている。

2. 高坏（第17図5）

河原石の下部より出土したものである。坏部の大部分と脚部のソコの部分を欠損しているため全体の形状をうかがうことはできない。一点出土したものである。

3. 円筒形土製品

高さ12.5cm、両端の切り口は不均等で、広い方が直径6.1cm、狭い方が4.7cmの円筒形の土製品である。中は空洞となっている。色調は黄褐色を呈し焼成はいたって堅緻である。輪積みによって製作している。長大な河原石の下に入り込んで出土した。いかなる目的で製作されたものであろうか。

2号祭祀遺構出土遺物（第18図）

出土遺物は土器のみであって土師器と須恵に分けられる。

土師器

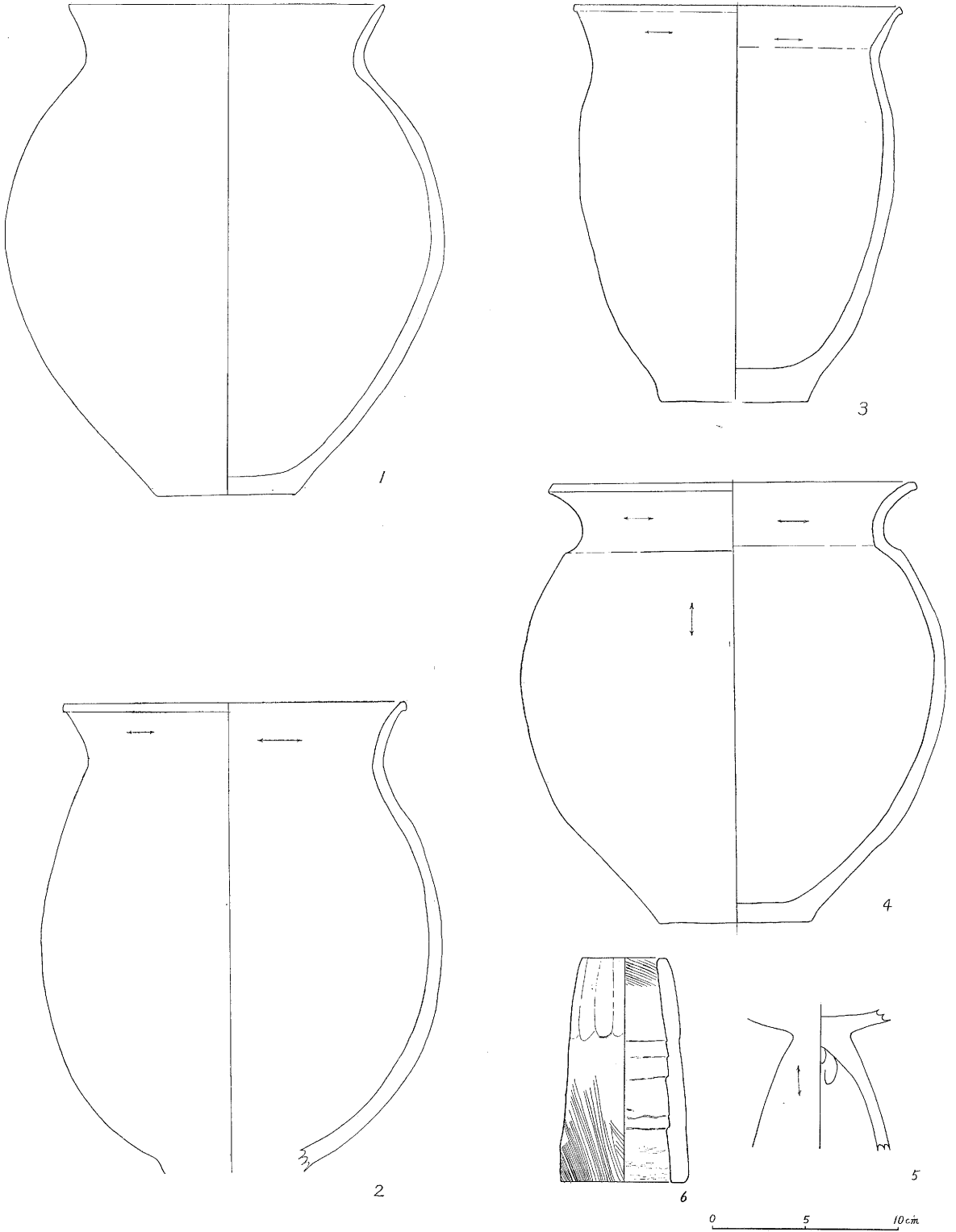
1. 甕形土器

1号祭祀遺構出土の甕形土器の器形が、胴部に膨みをもった球状の感を呈するのに対して、本遺構出の甕形土器は、口縁部から底部に向って細長い形を呈するのが特徴であろう。3は口縁部が短かく、外反しており頸部と肩部とのくびれがなくそのまま胴部へと移行する。胴部は下半で若干の膨みを有している。1は頸部から底部にかけて乱雑な刷毛目を施している。内面は整然とした櫛状工具によって整形している。赤褐色を呈し、焼成はいたって悪い。2は内外面ともに刷毛目を有している。色調は褐色を呈し焼成は比較的よい。

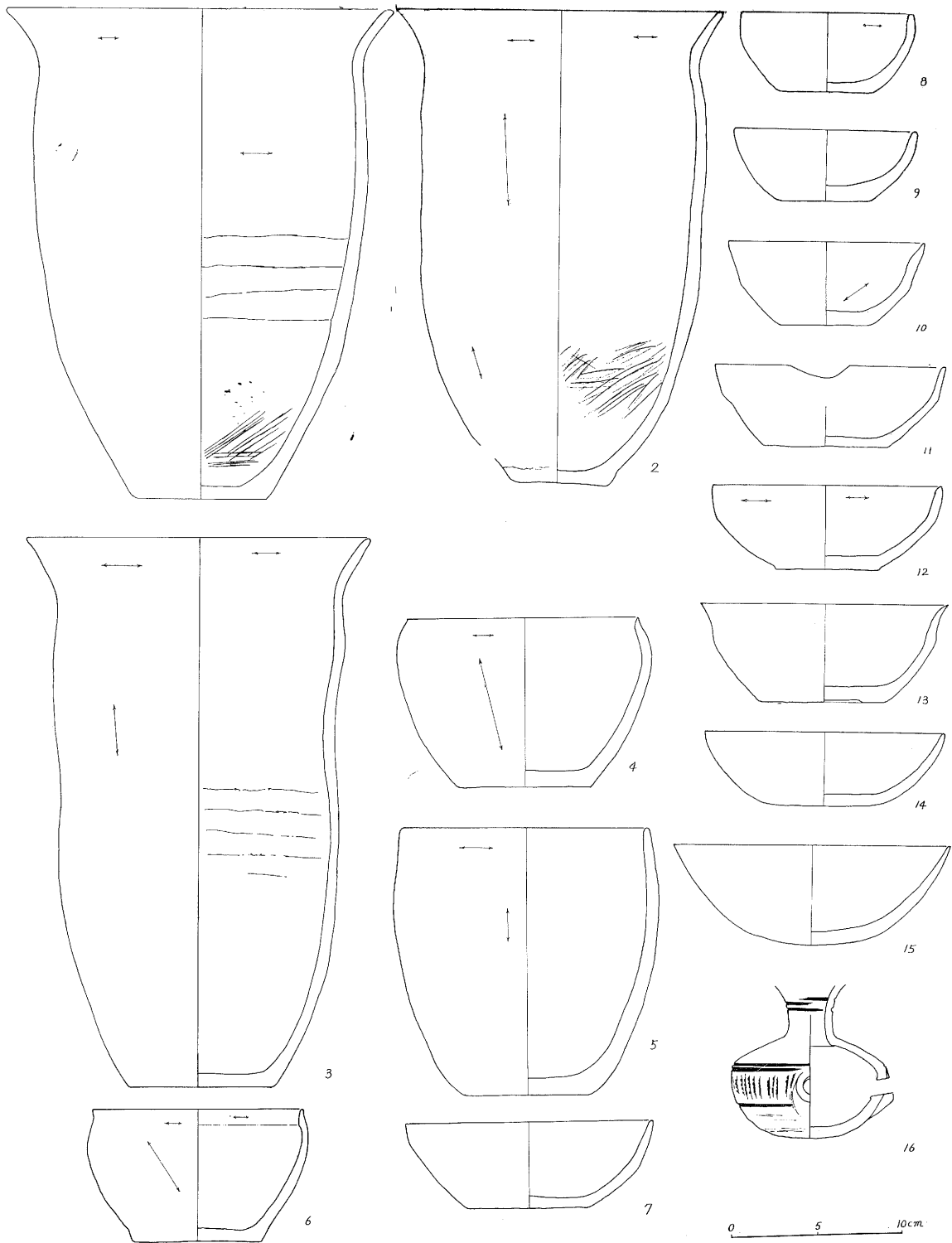
2. 鉢形土器

三点出土している。5は肩部で若干の膨みを有している。口縁はほぼ直立している。底部の造成はいたって粗雑である。全体的には焼成は堅緻で赤褐色を呈している。4は口縁部が内湾している。口縁部には刷毛目を横走りさせている。以下底部までの造成はいたって粗雑である。内面には刷毛目文を不規則に施しており底部は篋状工具によって整形している。色調は灰白色を呈し、表面の整形が粗雑な割には焼成は堅緻である。

6は口縁部下半部が内湾し、口唇が直立する。口縁部には刷毛目文を横走りさせている。口縁頂部の凹凸が著しい。底部は、別に製作して接合したらしく一部にその痕跡をとどめている。内面に



第17图 1号祭祀遺構出土土器実測図



第18图 2号祭祀遺構出土土器実測図

は、横走る刷毛目文を胴部下半まで施している。焼成はいたって堅緻で色調は褐色を呈する。

3. 環形土器

環形土器は、完形のもの6点、半分を欠くの3点。計9点出土している。器形からみて大、中、小に三分類出来る。

大形の坏には7のように底部が平底となるものと6のように丸底に近いものがある。中形の坏には、肩部でやや稜をつくるような状態で胴部があまり丸味をもたず底部にいたる11のものと14のように肩部が判然とせず丸やかま形で底部にいたるものがある。13は口縁上部が若干くびれ口唇が直立する形をとる。これは、環形土器とするよりは浅鉢形土器に近い形か、あるいは盥形土器とした方がよいのかも知れない。

小形坏は、器形の面からみると丸味をもっており、小形の壙形土器を思わせるものがある。

環形土器は、全体的に焼成はいたって堅緻であって甕形土器と比較するときより丁寧に製作され、焼かれたものと思われる。色調は赤褐色か灰白色を呈する。これらの環形土器には11のように製作する際に口縁の一部を欠きとったと思われるものもある。

須恵器一 (第18図16)

今回の発掘で唯一の須恵器である。しかも祭祀的な意味をもった遺物である点に重要さがある。D地区祭祀2号遺構とした配石に接して横転した状態で出土したものである。器形的には、頸部が比較的細く、頸部からの肩の張りは大きく、胴部までの丸味はうせている・惜しいことに口縁部下半を除いては、上部が欠損している。胴部から底部へはゆるやかな丸味をもっていた。底部は一応平底をとっているものの、未だ定型化した平底とはならず不安定な状態を示している。

頸部から肩部にかけて釉が認められる。内面にも頸部から底部にかけて釉を認めることができる。胴部から底部にかけては穿孔の部分を除いては釉は認められない。この釉は一般的には自然釉を解すべきものであるが、胴部にはほとんど形跡を認め得ないのは、あるいは意図したものであるかも知れない。しかしながら陶器については浅学で不明な点が多いためここでは自然釉としておきたいと思う。肩部末端から胴部中半にかけては、上部二条、下部一条の比較的太い沈線で区画され櫛状工具かあるいはそれに類似したもので一定の間隔をおいて施文している。

以上、1号祭祀遺構、2号祭祀遺構出土土器について述べてきた。そして、これらの土器はいずれも広義には鬼高式土器として取扱って差支えないものといえよう。しかし、1号祭祀遺構出土の甕形土器をみると比較的胴部が丸味を帯びて球状を呈するのに対して2号祭祀遺構出土甕形土器は、胴がほとんど脹らず長胴化の傾向が強いのである。また、1号祭祀遺構では、欠損しその全形を窺い得ないにしても高坏形土器が一例存するのは対して2号祭祀遺構ではその存在すら認めることができなかった。従って、この両遺構の間には若干の時代的差異が存するものと思われるのである。

一般的にいて、甕形土器が球状をとるものと長胴化の傾向が存するものとは、前者が古い形態を保持しているものとされている。このような観点が許容されるとするならば、1号祭祀遺構出土の甕形土器が古く、2号祭祀遺構出土土器の甕形土器の方が新しいとされよう。たとえば、1号祭祀遺構では第17図1、2、4のように丸味をおび球状を呈する甕形土器が存在するのに対して、2号祭祀遺構ではかかる形態は皆無であっていずれも長胴化の傾向が顕著である。ただ両者の新旧を論ずるにしても、両者の間にはそれほど画然とした年代差が存するものではないであろう。それは1号祭祀遺構出土の甕形土器3と2号祭祀遺出土の甕形土器2には強い親縁性が認められるからである。とはいっても出土土器の絶対量が僅少であるため両者の厳密な比較には無理な点が多いことも事実であろう。

さて、両遺構を通じて最も大きな相異点は坏形土器の存否であろう。2号祭祀遺構では9点の坏形土器の出土が認められるのに対して、1号祭祀遺構では皆無であった。ただ1点高坏形土器の出土をみている。2号祭祀遺構では高坏形土器は出土は全く見られなかった。和泉期における祭祀遺跡をみると高坏形土器の占める比重がかなり大きいものであったようである。祭祀1号遺構では、たったの1点ではあるにしてもその出土が認められる。それに対して2号祭祀遺構ではその祀跡すらも認めることができなかった。2号祭祀遺構に限定してみれば、和泉期多用された高坏形土器に代って坏形土器が神への祭器としての位置を占めるようになったといえるであろうか。

更に2号祭祀遺構においての出土をみたことも重要な意味をもつであろう。今回の発掘調査において、B地区で発見された鬼高期に所属すると考えられる住居址内出土遺物にも、1号祭祀遺構の出土遺物にも須恵器の存在を知ることができなかった。は頸部が細くなり、全体的に丸味が失っているのが年代的に新しいものとされていることを考えるとき、2号祭祀遺構の項で述べたように、2号祭祀遺構とは密接な関係があったしてよいであろう。換言すれば鬼高期後半の型式に該当する2号祭祀遺構出土土器との共存は認められるものであるといえよう。

雪深い奥信濃の僻遠の人々にとってこのこそ神に捧げるもっとも相応しい、そして最も敬虔な神への祈りであったのであろう。そのためにこそ、たった一点の貴重なが入手されたのである。

④ 遺構以外の遺物

ここでは住居址内、祭祀遺構以外で重立ったグリット内出土遺物について触れておきたい。

1. 鉄鏃 (第15図)

B地区(28・5)グリット黒色土層中より出土。全体的に錆が顕著で、原形を窺うことはできないが、現長14cmである。年代的位罫については不明である。

2. 滑石製円盤 (第15図5)

D地区(113、106)グリットより出土。不細工な作りである。穿孔は中央でなく片寄っている。2号祭祀遺構より1グリット距てて出土したものである。果して2号祭祀遺構と関連があるものかどうかはわからない。

3. 手捏土器 (第15図6、7)

D地区より2点出土している。6は(118、106)グリット黒色土層中より出土。ほぼ完形である。赤褐色を呈する。出土付近には数個の拳大の礫が存在した。7は(113、106)グリット出土のものである。滑石製円盤と同一グリットである。色調は灰色である。

4. その他の遺物 (第15図3、4)

第29図4はB地区(25、7)から出土した鉄製品であるが、用途および年代的位罫は不明である。3はE地区(118、111)出土の鉄製品であるが、これも4同様に不明である。(高橋 桂)

VI ま と め

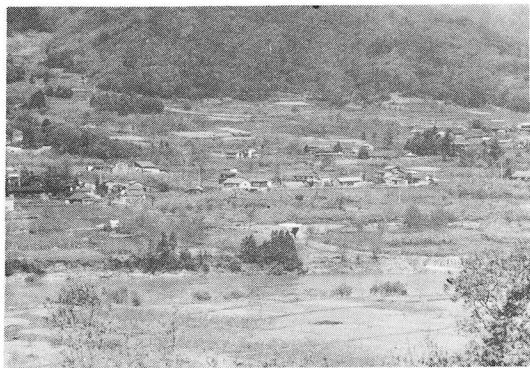
国道117号線静岡バイパス敷設工事に伴う田草川尻遺跡の緊急発掘調査が、昭和47年4月29日から5月14日までの計14日間にわたって行われた。この間、飯山建設事務所、飯山市教育委員会、地元

方々および先輩の方々から常に暖かい励ましの言葉や御援助、御指導を頂いた。ここに厚く御礼の言葉を述べたいと思う。

さて、環境の項で松沢が触れているように飯山市秋津には、飯山地方でも重要な遺跡が多く存在している。今回発掘した田草川尻遺跡もその1つで面積的に非常に広範囲にわたり、時代的にも各時代にわたっている。例えば、今回の発掘地点からおよそ1 Kmほど距た清川周辺の千曲川沿いの畑地、水田地帯にかけて、現在すでに昭和46年度の農業構造改善事業に伴う圃場整備によって無残に破壊されつくされてしまったけれども土師器の破片、縄文中期の土器、石器が各所に発見され本発掘地点から連続して広がっていたことが判明している。その中には、土師器時代一鬼高期に属すると思われる一に千曲川において漁業が行われたことを証明する土錘がまとまって出土しており、当時の生活の一端を物語る遺物も含まれている。

このような点からすると千曲川に近接した田草川、清川扇状地の扇端部は土師器時代後半の時期にはすでに大きな集落を形成していたものと思われる。そして、その系譜は奈良時代以降へと引継がれていたものであろう。この点についても松沢がすでに言及しているところである。

当初、私達は、発掘地帯が縄文式前期、弥生式中期に関する遺跡が主体となるものと考え期待していた。しかし発掘の結果は、土師器を中心とする遺構及び遺物であった。けれども問題点の多い鬼高期に属する住居址や祭祀遺構および遺物の検出をみたことは大きな成果であった。特に飯山地方における最初の祭祀遺構の検出は大きな意義があるものと思う。私達はこの発掘で得た成果をもとにして飯山地方の土師器研究、祭祀遺跡研究の第一歩にしたいと思う。(高橋 桂)



千曲川対岸より遺跡をのぞむ



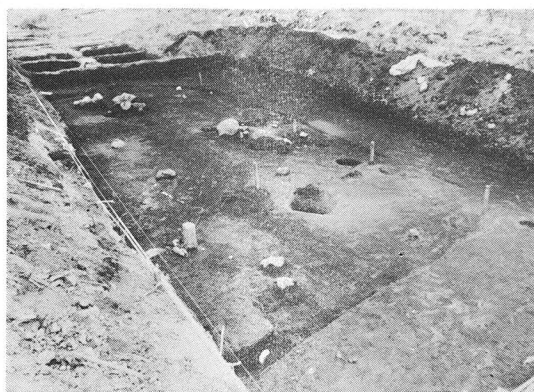
土 壙 群



B地区 発 掘 風 景



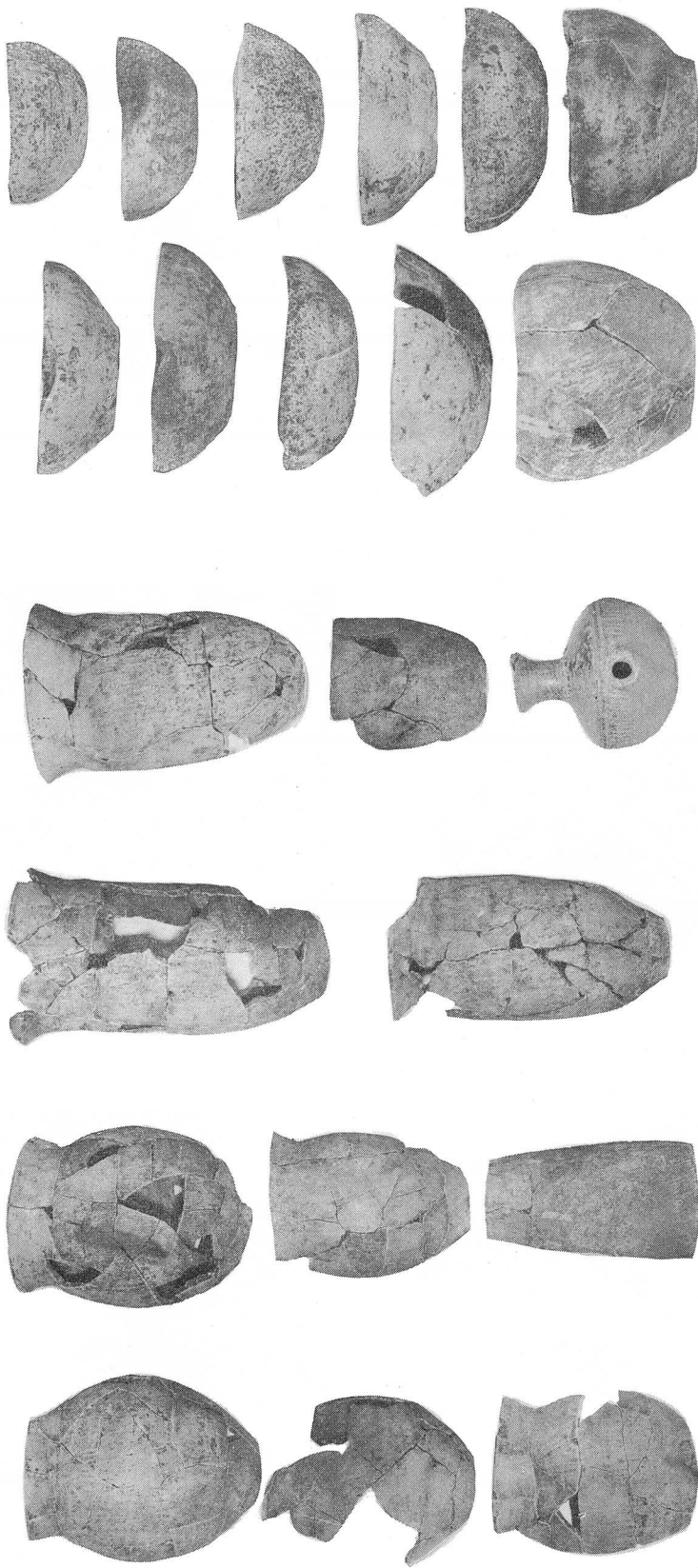
1 号 祭 祀 遺 構



H-3号 住 居 址



2 号 祭 祀 遺 構



2 号祭祀出土土器

2 号祭祀出土土器

1 号祭祀出土土器

